

歯学部ニュース

平成26年度第2号（通算126号）

特集 歯学部卒業おめでとう
歯学部 新執行部体制スタート
活動レポート

目 次

特集1 歯学部卒業おめでとう	1
学部長から 前田 健康	
副病院長から 高木 律男	
卒業生から 内川 恵里・下村 純平・宮 福子・高岡由梨那・笠原 典夫	
平成26年度 歯学部卒業生名簿	
大学院修了にあたり	8
上野山敦士・有松 圭・武井絵梨花	
平成26年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名	
平成26年度 大学院医歯学総合研究科口腔保健福祉学専攻修士前期・博士後期課程修了者論文名	
臨床研修修了にあたり	14
高田佳代子・永沼慎一郎	
総務委員会だより	16
前田 健康	
新執行部体制について	
歯科総括副病院長の選任について	
教授人事について	
平成27年度概算要求事項の採択について	
臨床系基礎実習室の整備完了について	
総合研究棟（歯学系：歯学部校舎）改修工事（第3期）の開始について	
学生との懇談会の開催について	
留学生交流支援制度（短期受け入れプログラム及び短期派遣プログラム）の採択について	
日本学術振興会学術システム研究センタープログラムオフィサー就任について	
転任によせて	22
興地 隆史	
活動レポート	23
海外活動 児玉 泰光	
SCRP報告 鹿間 優子	
短期留学を体験して 濱野 美咲・横関 麻里・小山 祐平・吉原 翠	
歯学部報告 ゴルフ部 神野 愛／バレー部 森 昂大	
留学報告	35
丹原 惇	
学会報告	38
吉羽 邦彦・齊藤 一誠・奥村 暢旦	
学会受賞報告	42
金子 友厚・井田 貴子・中島麻由佳・照光 真・岸本 奈月	
診療室・講座紹介	47
組織再建口腔外科学分野 教授 小林 正治	
歯科薬理学分野 助教 柿原 嘉人・教授 佐伯万騎男	
診療技術支援部便り	51
村上 ゆみ・大湊 麗	
素顔拝見	53
勝見 祐二・Marcelo Rosales・塩見 晶	
留学生紹介	57
Simonne Estacio Salazar	
部活動紹介	60
国際交流サークル 目黒 史也・サッカー部 渡辺 昌崇	
ポリクリを終えて	62
金井 梢	
早期臨床実習を終えて	63
内田 俊・牧口 由依	
学会報告	65
同窓会だより	66
医歯学祭を終えて	67
歯学科3年 山本 悠	
教職員異動	69
ミニコラム	74
編集後記	75





卒業を祝して

歯学部長 前田 健康

歯学科第45期生の皆さん、口腔生命福祉学科第8期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。新潟大学歯学部でかけがえのない学生生活を過ごし、本日めでたくご卒業される皆さんに、歯学部教職員を代表して、心からお祝い申し上げます。また、今日の日を一日千秋の思いで待ち焦がれていた保護者、ご家族の皆様のご尽力にも敬意を表するとともに、お喜び申し上げます。

卒業生の皆さんは、新潟大学歯学部の教育課程をすべて修了し、本日、学士の称号を与えられ、この春から、歯科臨床研修医、歯科衛生士、行政職、大学院への進学等、さまざまな道に進まれます。各人の進む道は異なるものの、歯科医学・医療、口腔保健・福祉に携わり、国民の健康の維持・増進に寄与するという皆さんの目標は同一であると思います。

我が国は世界でも例を見ない超高齢社会となり、また少子化の進行に伴い人口減少が加速している中、健康立国・健康長寿社会を実現することが国家政策の大きな課題となっています。とりわけ、歯学を取り巻く社会的要請として健康長寿社会実現への貢献、医療イノベーションの創出、国際的な医療課題の解決があげられており、国立大学法人歯学部には、超高齢・グローバル化に対応した人材育成が求められています。歯科治療の需要も健常者型から高齢者型に変化する中、健康長寿社会を実現するためには、生涯を通じた正常な口腔機能の維持、口腔疾患と全身疾患の関わりに関する高度化、超高齢社会に対応した歯科医療等への対応が必要とされ、歯学科卒業生の皆さんには歯科医療ニーズが変化する中で、口腔疾患と全身疾患の関連する領域を担うことができる専門医療職業人としての知識、技能が求められ、口腔生命福祉学科卒業生の皆さんには専門性に裏付けら

れたチーム医療推進のための実践能力及び地域医療連携業務に精通し、実践できる能力が求められています。

私ども新潟大学歯学部の教職員は教育目標である「口腔や食べることの視点から、包括的な歯科医療人を養成し、社会に貢献できる人材の提供」を目指し、皆さんにこれからの超高齢社会の中で活躍できる基盤的知識、技能、態度を教育してきたと自負しています。

皆さんは今日「口腔の健康を守るプロ」の一員となりました。社会は口腔保健・医療・福祉のプロフェッショナルとなる皆さんに対して幅広い教養、豊かな感性、厳しい倫理感を求めています。また、社会は皆さんに専門的知識やスキルを維持・向上させる責任を求めます。このため、皆さんにはさらに一層の常日頃の精進が不可欠となります。皆さんが社会から認められるために、今日の卒業式の日、これからの長い人生に向けて新たな目標を設定しましょう。歯科医療・口腔保健従事者という職業を真摯に受けとめながら、プロとしての自信と勇気を持って、社会に対して積極的に貢献することを目指してください。

本日、新しい夢を胸にスタートラインに立つ皆さんを、我々教職員一同はこれからも応援していきます。卒業する皆さんには、折を見て母校を訪ね、また生涯の学習の場として、これからも新潟大学歯学部を積極的に活用していただけるように願っています。皆さんが今日巣立っていく新潟大学歯学部は競争が激化している歯科界の中で、高い評価を受けています。我々教職員は皆さんに対し、これからの社会で勝ち抜くために必要な考え方、知識、技能を授けてきたと自負しています。新潟大学歯学部を卒業したという誇りを持ち、今後の活躍を大いに期待してします。



卒業生の皆さんへ

新潟大学医歯学総合病院 総括副院長 高木 律 男

歯学科第45期生ならびに口腔生命福祉学科第8期生の皆さん、この度のご卒業誠におめでとうございます。皆さんは今、新たな人生の舞台への立ちあたり、将来への夢や希望と緊張感に包まれておられることと思います。無事この日を迎えられることとお慶び申し上げますとともに、新潟大学歯学部で培った知識や技術を礎として、新しい環境の中で夢と目標に向かって、積極的に邁進されますことを期待いたしております。

皆さんには歯科医学や歯科医療、さらには社会福祉、口腔保健のプロフェッショナルとして、国民のQOLの維持・向上に貢献するという共通の目標があります。その実現のために皆さんが学ぶべきことは、日進月歩の歯科医学や歯科医療の中で、まさに無限といっても過言ではありません。新潟大学歯学部の教育カリキュラムは、臨床実習やPBLなど、自ら情報を収集し整理して習得する力を養うことを重視したものでありますので、皆さんには長い生涯学習の道程を乗り越えていくために必要な基礎的能力がすでに備わっているはずです。今の熱い気持ち＝“初心”を忘れることなく、卒直後から数年の豊富な吸収力を活かして、高度職業人として羽ばたくための基礎となる多くの力を速やかに蓄えて頂けることと思います。

一方、歯科医療を取り巻く環境は、決して順風満帆とは言えません。向かい風に抗する局面に耐える力が必要な時代ととらえることも必要でしょう。しかし、少し視点を変えることで、歯科医療

の可能性はまだまだ広がっていることも事実です。例えば近年では多職種連携が医療界のキーワードの一つとなっており、周術期口腔管理や摂食嚥下リハビリテーションなど、他職種との連携のもと“チーム医療”の一員として歯科の特殊性を発揮する場が広がりを見せています。また、歯科疾患と全身との関連が注目されていることも周知の通りです。さらには、高齢社会での「健康長寿」における歯を残すこと、咀嚼して食べることの意義もいたるところで耳にする様になっています。

この様に歯科医療は歯科界のみで完結するものではなく、医療全体の中の一分野としてその役割を果たすこととなります。それぞれの皆さんが経験する医療現場は、多種多様に分かれることになるとは思いますが、そこに共通するものは、患者さん中心の医療であり、それを提供するための基本は感染管理・医療倫理を含めた安心安全な医療です。まずは、この基盤をしっかりとした上で、基本的な歯科の知識および診療技術があり、そしてさらなるプロフェッショナルとしての専門性があります。この数年間が一生涯を通して各自がどこまで高められるかの基盤を固める上で非常に大切なことを忘れないでください。

最後になりますが、ご家族の皆様におかれましてはご子息、ご令嬢のご卒業、誠におめでとうございます。長年のご支援に厚く御礼申し上げますとともに、益々のご健康とご多幸を祈念しております。

卒業にあたり

歯学科6年 内川 恵里

この原稿を書くにあたり、歯学部の6年間を思い出してみたのですが、6年が一瞬で過ぎ去ったように感じます。

4年生まで生活の大部分を部活に費やしていました。今考えればもっとしっかり授業を聞いていれば…と思う事が沢山あります。

そのせいか、歯学部での生活の記憶が薄いというのがありますが、その事を抜きにしても臨床実習は濃密で今までに感じたことのないプレッシャーがかかる1年間でした。

頼っていた先輩からの引き継ぎが終わり、初めて診療を1人でする日に、手汗でグローブがはめられない程緊張したことを、未だに覚えています。

診療で新しいことをする度に、基礎実習の時に先生方が毎回のように「患者さんがいるつもりでやりなさい。」とおっしゃっていた意味が、ようやく理解できました。今まで、模型で実習してきたことを実際に行うことがこんなに難しいことなのかと感じる毎日であり、自分の無知さに愕然とする毎日でした。

また、50年に一度の引越で歯学部から外来まで外を歩くという、冬の新潟を感じることができました。転んで模型を壊さないように凍った道を避けて歩いたり、風で模型やレポートが吹き飛ばされないように踏ん張ったり、今となってはいい思い出です。



そんな日々の中で、支えになったのはやはりクラスの皆だったと思います。技工室はいつも明るくて、疲れて帰った時にほっと一息つける場所でした。共に励ましあって支え合うことが出来たからこそ、45期の全員で臨床実習を乗り越えられたと思います。

最後に、どれだけ時間がかかっても文句ひとつ言わずに、それどころか「ありがとう。」と仰ってくださいました患者様、忙しい中時間を割いて様々なことを教えてくださった先生方、45期の皆、そして手のかかる45期を叱咤激励し、引っ張ってくださったヘッドインストラクターの芳澤先生に深く御礼を申し上げます。これから卒業して社会の一員になった時に、この経験を土台として着実にステップアップをしていくことが、努めだと思っています。

ありがとうございました。

卒業にあたり

歯学科6年 下村 純平

新潟大学に入学して早くも6年が過ぎようとしています。僕は出身が京都府であり、新潟大学に入学するまで新潟は全く縁のない土地でした。入学当初、新潟では環境の違いにとまどいました。街の雰囲気や言葉の違い、食べ物の違い、気候の違い（これだけは苦手です）…のこと以外にも関西では体験できなかった様々なことを体験できたと思います。大学生活の中で特に印象に残ったことを書いていきたいと思っています。

1番印象に残ったのは5年生後期からの臨床実習です。自分が主体となって患者様を診療させていただくことで座学では学ぶことのできなかった、臨床の知識を学ぶことができました。実習中は先生方ならすぐに終わらせてしまうような処置でも必要以上に時間をかけてしまうことや、自分の思い通りに診療が進まないことが多々ありました。至らない点が多い中、丁寧に指導してくださったライターの先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。自分がこの1年間で経験して得た知識や技術が無駄にせず、今後の診療に生かしてい



たいと思いました。

また6年間で学校以外のことで一番打ち込んだのがテニス部での活動でした。僕は大学から初めてテニスを始めたのですが、部活を続けていくうえで先輩方のテニスに対する姿勢や試合で活躍する姿に刺激を受け、自分ももっと上手になりたいと思うようになり、ひたすら部活に行き続けました。6年のデンタルで引退するまで、ほとんど部活を休まなかったのはちょっとした自慢です。毎年レギュラーの人数がギリギリの中、勝つことを考え練習に臨み、デンタルで勝利を勝ち取ったときは本当に最高でした。真面目で部内の雰囲気も良い、いい部活です。

さりげなくテニス部の宣伝をさせていただいたところで、原稿を終えたいと思います。

最後になりましたが、新潟大学でお世話になった先生方、友達、大学生活を支えてくれた両親に心から感謝申し上げます。

卒業にあたり

歯学科6年 宮 福子

長い長いと思っていた6年間も終わり卒業を迎えることができ、ほっとしたような寂しいような気持ちです。今回原稿依頼を頂き何を書こうか悩みましたが特に思い出深い二つに絞って書きたいと思います。

一つ目は私が所属した硬式テニス部についてです。毎年懲りずに真っ黒に焼け、テスト前でも休まず気合いと根性で乗り越え…。ある意味とても

大学生らしい思い出を沢山作ることができました。大学から始めたテニスでしたが熱中することができ私の大学生活を充実したものにしてくれました。そしてなにより先輩後輩、OBの先生方との繋がりが出来たことが大きな財産となりました。卒業後も続いていくこの繋がりをこれからも大事にしていきたいと思っています。

二つ目は5・6年次に行う臨床実習です。歯学部講義・実習の集大成となる臨床実習で学生は初めて患者さんを診ることになります。「患者さん」を診ることの責任から、それまでの甘かった意識も変わりました。今まで座学で培った知識、模型実習で身に付けた手技を総動員して挑みましたがそれでも上手くいかない事だらけで患者さんにも沢山の迷惑をおかけしましたし、先生方には相当怒られました。申し訳ない気持ちで一杯で情けなく自信を無くしましたが、患者さんは優しく実習に協力してくださりましたし、先生方も最後まで見捨てず向き合い見守ってくださいました。周りの方の支えで最後までやり遂げる事ができ手技だけでなく人間力が鍛えられたと思います。ご協力頂いた患者さん方の優しさは一生忘れません。患者さん方に恥ずかしくないような歯科医師になるよう今後も頑張りたいと思います。

振り返ると無事卒業を迎えることができたのは周りの多くの方の支えがあったことを痛感します。今までお世話になった先生方、先輩後輩、両親、そして同期のみんなに感謝します。本当にありがとうございました。



卒業にあたり

歯学科6年 高岡 由梨那

「10年後の自分が何をしているか想像できますか」「全く何も想像できません」

推薦入試の面接でそう答えてから6年、気が付けば24歳となり、いつのまにか「大人」の分類に足を踏み入れていました。あと4年で当時から10年となりますが、歯科関係では今も想像できないでいます。まだ自分が進みたい道を整理できず、何を学びたいのか、学んで何をしたいのかを具体的にすることができていません。これから先も学ぶことからは逃げられないので、いつか自分が進む道を決められると信じて、未来の自分に期待したいと思います。

難しい話はこれくらいにして、大学での生活をまとめます。皆、口をそろえて言うと思うのですが、「45期生は出来が悪い上に、やる気がない」と6年間ずっと言われ続けたことは、とてもいい思い出です。当初は傷つきましたが、学年が上がっていくにつれて、とても前向きな私たちは、開き直っていました。私たちがなりに一所懸命に課題に取り組み、努力をしていたつもりでしたが、受け入れてもらえなかったようです。ですが、ちらほらと私たちを認めてくださる先生が現れ、「想像していたより悪い子たちじゃない」と仰っていただけたときは、とても嬉しかったです。他の学年より厳しく扱われたことで、精神的強さが鍛えられたのではないかと感じます。これから先、こわい社会で生き抜いていくために、とても



役立ちそうなスキルを身に付けることができました。

私にはちょっとした夢があります。「有給休暇を二つ返事でもらう」というものなのですが、働いている人たちから話を聞く限り、とても難しそうです。家族のイベントや子どもの行事には、私の両親がそうであったように「皆勤賞」でありたいです。仕事も大事ですが、家族のほうが大切なので、頑張りすぎない・ゆとりある人生を送りたいです。10年後は、必要な有給休暇をもらうときに、嫌な顔をされずにもらえるよう「立派な大人」になっていきたいです。

卒業にあたって

歯学科6年 笠原 典夫

歯学部編入して早いもので4年が経とうとしている。

同期に編入したのは私を含め4人で、それぞれに複雑な背景があった。家庭を郷里に残してきたもの、東日本大震災に被災したものの、某大企業の内定を辞退して編入したものなど、それぞれにとって厳しい環境にあったためか、または偶然にも気が合ったためかは分からないが、何をすることも4人で協力し、乗り越えてきた。

今我々が共通して抱えている感情を言い表すに相応しい詞を探すとすると「感謝」であろう。通常であれば6年の修業年限が必要な歯学教育を4年に短縮してもらい、今こうして最終学年として国家試験の勉強をさせてもらっている。また、力



リキュラムにも工夫がなされ、編入後も無理なく専門教育が受けられるように組まれていた。先生によっては編入生のために特別に授業を設けてくださったこともあった。正規組（一年生から入学した同級生）も試験日程やクラスの仕事を配慮してくれる一方で、歳の差と反比例するかのような親しみを持って接してくれた。実習では先生方との距離も近いせいか、または形態学的に特徴

があるためか、とにかく我々4人は気にかけていただくことが多かった。中には私より年下だと分かった瞬間から学生の私に対し敬語を使ってください先生までいらした。以前、私が所属していた某医療系大学ではあり得ないことである。それはさておき、実習の内容も綿密に組まれており、基礎実習から臨床実習への移行がスムーズに行え、卒前臨床実習では年齢不相応なほど丁寧に指導していただいた。

我々4人が今こうしていられるのは前記のような奇跡の連続の上に成り立っていることに気付かされ、この4年を回顧するにあたり、感謝の念を禁じ得ない。

国公立大学歯学部編入学試験は今や三校しか実施されていない。そのように稀な制度を今現在も実施してくれている新潟大学歯学部。カリキュラムの素晴らしさに比例しない学力の我々を温かく指導して下さった人間味溢れる個性豊かな先生方。異次元から来た我々を何気なく受け入れてくれた同級生たち。皆々様に心よりの感謝と御礼を申し上げ、稿を終えたいと思う。



大学院修了にあたり

大学院修了にあたって

顎顔面口腔外科 上野山 敦 士

研修医を終え一度は開業医に就職したものの、口腔外科の重要性を痛感し、「口腔外科をしっかり学びたい」そんな思いからの大学院でした。

私は生まれは新潟ですが、学生～研修医まで北大で勤務医時代は横浜でした。大学院に行くにあたり、これを機に新潟へと思い、新大顎外科にお世話になることを決めました。

ほとんど知り合いがいないなどアウェー感たっぷりの中でスタートは大変で、まず先生の名前がわからない、どの診療室がどこにあるかもわからない、さらには当時の口外外来と病棟は遠く、行き来も病院の構造上やや複雑で、毎日汗かくで何往復もしていました。それでも4年も経つと、引越し等で多少の環境の変化はありましたが毎日いて当たり前前の空間になり、友達や知り合いもかなり増え、いつの間にかアウェー感は消えていました。

さて、大学院生の本分の研究についてですが、当初具体的に何がやりたいというのはなく、漠然と研究するなら基礎でやりたいという程度しか考えていませんでした。そんな時、縁あって当時口腔解剖のKenji先生（現生体組織再生工学分野教授）が私を受け入れて下さり、大学院2年目から口腔解剖での研究生活が始まりました。研究内容については長くなってしまいますのでここでは深く触れませんが、Kenji先生の研究のベースが患者さんから採取した口腔粘膜の細胞を培養して実験に使うことにあるため私の研究も自然とそれに準じた研究となりました。最初は細胞培養の基本手技から始まり、ウエスタンブロット法や免疫組織化学など様々な実験手技をKenji先生や共に研究していた先輩先生から教えていただきました。細胞

にもそれぞれ個性があって元気が良くてあっという間に増えるのもいれば、のんびり増えていくのもいてなかなか成長をうまくコントロールできず土日昼夜と関係なく大学に来たりと苦労したことが多々ありましたが、ペットのような感じで愛おしくも思えるものでした。また、他の口腔解剖の先生や他科から口腔解剖に研究に来ていた大学院生にも仲良くしていただきましたし、研究という名目で1ヵ月程ミシガン大学に行かせてもらったり、学会で国内はもちろんタイやハワイにも行かせてもらうことができたりと大学院生ならではのたくさんの貴重な経験をさせていただきました。

大学同期の中には分院長になったり開業する人も出始めてきている中で“学生”であることに戸惑いを感じることもありましたが、腰を据えて何かひとつのことを求めることは有意義なことであり、開業医ではなかなかできることではありません。様々な人との出会いも含めて、新潟大学の大学院に入って本当に良かったと思います。

最後に、この場を借りてお世話になった全ての方にお礼申し上げますとともに、これからも変わらずお付き合い下さいますよう宜しくお願い申し上げます。



大学院修了にあたり

新潟大学大学院医歯学総合
研究科歯周診断・再建学分野 有松 圭

歯周診断・再建学分野の有松と申します。時間が過ぎるのは早いもので、あっという間に4年間が経ちました。私は歯周病の研究がしくて歯周診断再建学分野の大学院に入りました。この4年間自分のできる限り、思う存分に研究をさせて頂きました。

そこで、学位論文にもなりました私の研究の紹介をさせて頂きます。私の学位論文のタイトルは *P. gingivalis* induces systemic diseases via dysbiosis of gut microbiota で、歯周病が全身に及ぼす悪影響の新たなメカニズムを明らかにしたものです。

歯周病は、心筋梗塞や狭心症などの原因となる動脈硬化症、糖尿病、非アルコール性脂肪肝疾患、関節リウマチ、ある種のがんなど、実に様々な疾

患の進行を促進すると報告されています。これまで、その関連メカニズムとして歯周組織から侵入した歯周病原細菌や、炎症性サイトカインが全身循環を經由して血管、脂肪組織、肝臓などに炎症を起こすということが考えられていましたが、はっきりとした証拠は示されていませんでした。

我々の研究で、有力な歯周病原細菌の一つである *Porphyromonas gingivalis* をマウスの口腔に投与し、飲み込ませたところ、腸内細菌叢が大きく変化することが明らかになりました。加えて血清中のエンドトキシン活性が上昇し、各組織と全身における炎症及びインスリン抵抗性が惹起されることが明らかとなりました。

重度の歯周病患者さんの口腔内には大量の歯周病原細菌が存在し、毎日唾液とともに飲み込まれています。腸内細菌と全く異なる病的口腔細菌が腸内細菌のバランスを崩し、その結果、腸の透過性が亢進し、そこから入ったエンドトキシンが血流を介して様々な臓器・組織に軽微な炎症を持続させると考えられます。

本研究が歯周炎の全身疾患を進行させるメカニズムの解明につながると考えています。

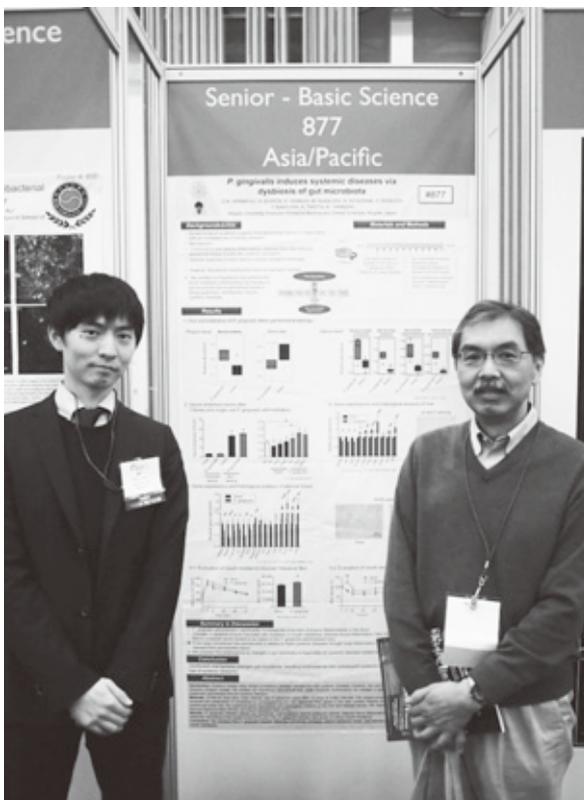
以上が私の研究の紹介になります。4年間、あまり辛いと感じることなく楽しく研究が出来たと思います。

研究の次に、良い経験が出来たと思うことは海外での学会発表でした。2013年にアメリカ合衆国・シアトルでの第91回 International association for dental research (IADR)、2014年に南アフリカ共和国・ケープタウンでの第92回IADRにて発表させて頂きました。

学部生時代に行った海外旅行とは違い、アカデミックな経験が出来ました。

この経験を糧として、今後も更に研鑽を重ねてまいりたいと考えております。

最後になりましたが、御指導下さいました山崎和久教授、多部田 康一先生、中島 貴子先生、吉江 弘正教授ならびに御協力頂きました共同研究者の方々に、この場をお借りして心より御礼申しあげます。



2014年ケープタウンでのIADR学会発表

大学院修了にあたり

う蝕学分野 武井 絵梨花

早いもので大学院に進学して4年の月日が過ぎようとしています。私は文章を書くのが苦手なのですが、せっかくいただいた機会なので、大学院生活をふり返りたいと思います。

う蝕学分野の大学院に進学し、1年生から外来での診療と研究が始まりました。大学院生になり始めて担当させていただいた患者さんは、右下6番に咬合痛を自覚され、頬側に瘻孔のある患者さんでした。根管治療によって症状が改善され、瘻孔も治癒し、根管治療ってすごいと感じたことを覚えています。もうすぐ4年が経ちますが、現在でも通院してくださっていて、とてもうれしく思っています。う蝕学分野の特徴の一つには、顕微鏡を使用した根管治療が挙げられると思います。旧外来棟から新外来棟へ引っ越しにより、ほとんどのユニットに顕微鏡が設置され、顕微鏡がより身近なものになりました。初めは根管を見るまでの調整に時間を要してしまい、顕微鏡の良さが理解できませんでしたが、慣れてくるととても便利に感じるようになりました。肉眼では分からなかった根管の様子に分かって治療することができたり、見つからなかった根管を見つけることができたりしたときはとてもうれしくなりました。しかし、根管治療を行っていくにつれ、根管治療は難しく、もっと経験を積まなくてはならないと実感しています。外来では、他科の先生方に治療方針などの相談から治療に至るまでたくさん助けていただき、根管治療だけではなく、補綴治療等も学ぶことができました。お忙しいところ丁寧に教えていただき、とても感謝しています。

大学院に進学してから初めて研究というものを

経験しました。過程の一つ一つが分からないことばかりで、先生方から方法などたくさんのことを教えていただきました。私は、MTAを用いた生活断髄後のラット臼歯歯髓の反応についての研究を行いました。マクロファージには、微生物感染時に活性化し、炎症反応を促進するサイトカインを産生する古典的活性化(M1)マクロファージと、炎症反応の調節、組織修復や創傷治癒へ関与していると考えられている組織修復等に関与する創傷治癒(M2)マクロファージがあります。研究により、MTAによる生活断髄後、露髄部直下には、M2マクロファージマーカーを発現する細胞が、被蓋硬組織形成に先立ち一時的な集積を示すことが分かりました。このことから、歯髄における創傷治癒初期過程において、M2マクロファージが重要な役割を果たしていることが示唆されました。得られた結果は、学会にて報告しました。学会で行ったことのない場所に行くことができるので、研究のモチベーションになっていました。診療においても、研究においても、まだまだ学ぶべきことがたくさんあると思います。大学院において学んだことを生かし、これからも成長していきたいと思っています。

最後になりましたが、興地隆史教授をはじめ、う蝕学分野の先生方々、外来スタッフの方々にこの場をお借りしまして心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。



筆者は下段一番右

平成26年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名

博士の専攻分野の名称	氏名(専攻)	博士論文名
博士(歯学)	瀧口 知 彌 (口腔生命科学)	Oral health and depression in older Japanese people (日本の高齢者における口腔健康状態とうつ)
博士(歯学)	武井 絵梨花 (口腔生命科学)	Initial Transient Accumulation of M2 Macrophage-associated Molecule-expressing Cells after Pulpotomy with Mineral Trioxide Aggregate in Rat Molars (Mineral Trioxide Aggregateを用いた生活断髄後のラット臼歯歯髓の反応: M2 マクロファージ関連分子陽性細胞の一過性集積)
博士(歯学)	切手 英理子 (口腔生命科学)	捕食量による咀嚼運動の相違に関する研究
博士(歯学)	山田 瑛子 (口腔生命科学)	Relationship between concentrations of antiretroviral drugs in plasma and saliva of HIV-1 infected individuals (HIV-1 患者における血中と唾液中の抗HIV薬濃度の関係)
博士(歯学)	上野山 敦士 (口腔生命科学)	Effects of C-xylopyranoside derivative on epithelial morphogenesis in an organogenesis model of oral mucosa (3次元口腔粘膜培養モデルを用いたC配糖体が上皮形態形成に及ぼす効果の検証)
博士(歯学)	有松 圭 (口腔生命科学)	Oral pathobiont induces systemic inflammation and metabolic changes associated with alteration of gut microbiota (口腔内病原性細菌が腸内細菌叢の変動に関連した全身性の炎症と代謝性の変化を誘導する)
博士(歯学)	山田 ひとみ (口腔生命科学)	Endoplasmic reticulum stress response and bone loss in experimental periodontitis in mice (実験的歯周炎マウスにおける小胞体ストレスと骨吸収の関連)
博士(歯学)	花井 悠貴 (口腔生命科学)	Relationships between IL-6 gene polymorphism, low BMD and periodontitis in postmenopausal women (IL-6 遺伝子多型が歯周炎と Low BMD に与える影響)
博士(歯学)	皆川 高嘉 (口腔生命科学)	Resveratrol suppresses the inflammatory responses of human gingival epithelial cells in a SIRT1 independent manner (ResveratrolはSIRT1 非依存的に歯肉上皮細胞の炎症性応答を抑制する)
博士(歯学)	神谷 真菜 (口腔生命科学)	X線局所照射による唾液腺傷害とT細胞の関与: マウスによる実験的検証
博士(歯学)	西野 和臣 (口腔生命科学)	An analysis of facial changes in skeletal Class III patients following mandibular setback surgery using a three-dimensional system with integrated CBCT and dental cast data (CBCT・歯列模型三次元統合モデルを応用した顎矯正手術前後における顔貌軟組織様相の解析)
博士(歯学)	坂上 馨 (口腔生命科学)	個性正常咬合者と骨格性下顎前突症患者の嚥下時舌圧発現様相の比較検討
博士(歯学)	大西 淑美 (口腔生命科学)	骨吸収抑制薬(ビスフォスフォネート製剤)による顎骨壊死と口腔衛生状態との関連
博士(歯学)	辻 光順 (口腔生命科学)	Changes in the frequency of swallowing during electrical stimulation of superior laryngeal nerve in rats (ラット上喉頭神経電気刺激中における嚥下頻度の変化)
博士(歯学)	竹石 龍右 (口腔生命科学)	Short and Long-term effects of pharyngeal electrical stimulation on swallowing performance in healthy humans (咽頭電気刺激がもたらす嚥下機能への短期および長期効果)

博士の専攻 分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	渡 辺 泰 典 （口腔生命科学）	Differences in Healing Patterns of the Bone-Implant Interface between Immediately and Delayed-Placed Titanium Implants in Mouse Maxillae （マウス上顎骨における即時埋入と遅延埋入チタンインプラント間の骨・インプラント界面の治癒パターンの相違）
博士（歯学）	齋 藤 大 輔 （口腔生命科学）	Relationships among maxillofacial morphologies, bone properties and bone metabolic markers in patients with jaw deformities （顎変形症患者における顎顔面形態と骨代謝マーカーならびに骨質との関係）



平成26年度 大学院医歯学総合研究科口腔保健福祉学専攻博士前期・博士後期課程修了者論文名

専攻分野の名称	氏名（専攻）	論文名
修士 (口腔保健福祉学)	近江 奈緒 (口腔生命福祉学)	歯科衛生士による歯周組織検査タイムスタディ
修士 (口腔保健福祉学)	藤井 香那 (口腔生命福祉学)	標準的な成人歯科健診プログラムによる歯科保健行動の変容
修士 (口腔保健福祉学)	星野 美帆 (口腔生命福祉学)	舌清掃器具の違いによる舌清掃効果の比較
修士 (口腔保健福祉学)	稲野辺 紫巳 (口腔生命福祉学)	歯科衛生士によるTCH是正指導の効果の検討
修士 (口腔保健福祉学)	植木 麻有子 (口腔生命福祉学)	知的障害者の口腔内・食事状況からみた歯科衛生士支援のあり方
博士 (口腔保健福祉学)	田口 可奈子 (口腔生命福祉学)	成人の歯科予防処置に必要な歯科衛生士数の推計
博士 (口腔保健福祉学)	塚田 しげみ (口腔生命福祉学)	歯科専門職介入の必要性を判断するための多職種向けスクリーニング用紙の開発 ～歯科医師と施設看護師・介護職員によるスクリーニング結果の比較検討～
博士 (口腔保健福祉学)	當摩 紗衣 (口腔生命福祉学)	ブラッシング運動と歯垢除去効果の関連－歯科衛生士と一般成人の比較－



臨床研修修了にあたり

臨床研修終了にあたって

歯科総合診療部 高田 佳代子

2014年度臨床研修Aコースで研修歯科医としてお世話になっている、本学44期生の高田佳代子と申します。今回このような原稿を書く機会を与えて頂いたので、1年間の研修生活について振り返ってみたいと思います。

まず私がAコースを選択した理由ですが、私の性格上、まずは一カ所に身を置いてじっくりと知識・技術を身に付けられる環境がいいなと思っていました。学生時代の臨床実習中、同じ診療室内で先輩方がどのような研修を受けているのか間近に見ており、自分の希望する研修生活と一致したのでAコースを選択しました。

今年度Aコースのメンバーは本学出身者10名、他大学出身者が16名。2人1組のペアを組み、主に1時間半枠で診療を行います。私は指導医・藤井教授の元、永沼先生とペアを組み、研修生活がスタートしました。4月に患者さんが19名配当されましたが、初めて山積みのプロトコールを目の前にした時は、免許を手にしたとはいえ、学生実習以来臨床から離れていた私が本当に診療できるのかとても不安になりました。しかし、Aコースでは研修医という立場であっても主治医として患者さんと向き合うことができるので、必死に予習し、初診療を迎えたことを覚えています。診療後は次回どうしたらもっと上手くできるかを同期と話し合ったり、不足していた知識を補う日々でした。ようやく焦らず行える処置が、少しずつ増えてきたかなと思う頃、研修生活も終盤を迎えており、本当に1年間あっという間だなと実感しています。予想外な状況に直面した時も、アシストに付いてくれているペアは意外と冷静な場合が多

く、お互いに助け合いながら沢山のことを勉強できたことは本当に良かったと思っています。

この1年で経験できた症例は数少ないですが、似たような処置であっても口腔内状態によって考慮すべき点は異なり、患者さんごとに最善策を考えられる力が重要で、そしてそれがとても難しいことだと学ぶことができました。まだまだ治療が上手いかずへこむことも多いですが、患者さんから「入れ歯が痛くなくなって美味しくご飯が食べられるようになった」「しっかり噛めるようになった」「見た目が綺麗になって良かった」というお言葉を頂くと、(私は他学部卒業後、本学に編入学したのでとても遠回りしてきましたが…)今こうして歯科診療に携わることができて本当に幸せです。

新年度からは、長年生まれ育った新潟市を離れることになりましたが、この1年間で得た出会いと経験を大切に頑張っていきたいと思います。最後になりましたが、歯科総合診療部の指導医をはじめ、医員・レジデントの先生方、共通研修でお世話になった先生方、同期の先生方、衛生士・看護師のスタッフの皆様には感謝申し上げます。1年間、本当にありがとうございました。



研修歯科医控室にて(筆者、右端)

臨床研修修了にあたり

研修歯科医 永 沼 慎一郎

登院式以降、藤井教授が研修医全体に言い続けてきた言葉が有ります。「研修期間はあっという間に過ぎ去ります。お盆が過ぎると直ぐにジングルベルが聞こえて来てあっという間に年を越します。」この言葉が身にしみて実感するような時期となっていました。

私は新潟大学臨床研修プログラムのAコースで研修させて頂きました。Aコースでは歯科総合診療部において、配当された患者さんに対し治療計画を立案し1年間治療を行なっていくプログラムが中心となります。そのプログラムの中に希望者のみ抽選で新潟県内にある各保健所で1週間、他大学の研修医とペアになって保健所臨床研修を行うことが出来ました。私は幸運な事に抽選で選ばれ新潟市保健所で研修させて頂きました。

本研修では普段は見ることのできない保健所内で行われる様々な業務について講義や見学、体験実習と合わせて、一般市民の方々に向けた講話の資料製作・発表を行ないます。講話では1時間を使い、70~80代の一般市民約30名に対し「お口元気に毎日楽しく」と題し、誤嚥性肺炎やお口の中と入れ歯のお手入れの仕方、嚥下体操などのテーマでお話しさせて頂きました。講話を通し、一般の方々がお口の中や歯科治療などに関心がさほど高く無く、合わせて沢山の疑問を持っている事、時にテレビや雑誌などで見聞きした間違っただ情報を鵜呑みにされ生活されている事、そして歯科医師が無意識に使っている言葉が如何に通用しないかなど多くの事に気づかされました。この経験から研修期間中は努めて、患者さんに分かりやすく丁寧に説明しようと意識するようになりました。

外部出身者である私は、右も左も分からない状態で新潟大学での研修をスタートし、不安でいっぱいの中必死に頑張ってきました。失敗し凹んだこともありましたが、さすが患者さんから「良くなりました、ありがとう。」と言って頂いたり、診療のポートフォリオのフィードバックで先生に褒められると、日々自分が少しずつでも成長してい

ると実感できる様になりました。今まで出来なかった事が出来る様になる、分からなかった事が分かる様になっていく、それがただただ嬉しかったです。この1年間頑張れたのも指導医であった藤井教授をはじめ、総合診療部の先生方が様々な面で時に優しく、時に厳しくご指導頂けたお陰だと思っています。そして同じAコースの仲間達と侃々諤々症例について話し合えた事、一緒にキャンプに行ったり、新潟まつりでお神輿を担いだり、研修医控え室で他愛もない話で盛り上がった事、その一つ一つが支えであり研修における大切な宝となりました。そしてペアで一年間診療を共にした高田先生には様々な面で助けられました。互いに切磋琢磨し成長出来た事嬉しく思います。この度お世話になった全ての方々に、そしてこの様な素晴らしい経験が出来たこのプログラムに対し心から感謝したいと思います。本当にありがとうございました。



筆者は写真の左上に黒いTシャツを着て写っています。写真は研修医仲間で小旅行をした際に会津、鶴ヶ城の前で撮影。

新執行部体制について

前田健康歯学部長が再任されたことに伴い、副学部長に小野和宏教授（学務担当兼評議員）、宮崎秀夫教授（歯学科長兼渉外担当兼医歯学系副学系長兼評議員）、魚島勝美教授（国際担当）が再

任され、新たに研究担当副学部長として寺尾豊教授が任命されました。また大内章嗣教授（学部長補佐）、葭原明弘教授（口腔生命福祉学科長）も再任されました。

歯科総括副病院長の選任について

興地隆史前歯科総括副病院長の退職に伴い、高木律男教授が歯科総括副病院長に選出されました

（平成27年1月1日付）。また小林正治教授が副病院長（企画運営 [歯]）に発令されました。

教授人事について

包括歯科補綴学分野担当教授として、平成26年10月1日付で小野高裕先生（前大阪大学大学院歯

学研究科准教授）が発令されました。

平成27年度概算要求事項の採択について

平成27年度政府予算案が決定されたことにより、文部科学省より、歯学部分として以下の予算の内示がありました。

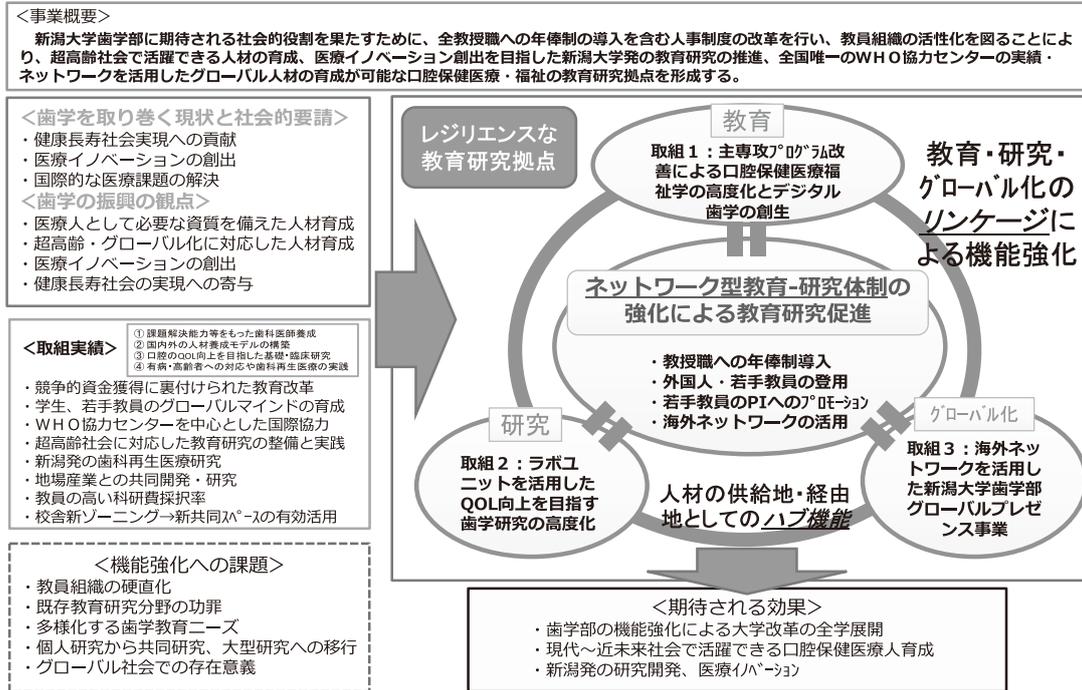
◇特別経費プロジェクト分

- ・ネットワーク型教員組織の構築によるレジリエンスな教育研究拠点の形成（新規事業）

【概要】平成27年4月から教授職全員への年俸制導入を端緒とした教員活性化策を行い、超高齢化した現代社会で活躍できる口腔保健医療

福祉人材の育成、医療イノベーション創出を目指した新潟大学発の教育研究の推進、全国唯一のWHO協力センターの実績・ネットワークを活用したグローバル人材の育成が可能な口腔保健医療・福祉の教育研究拠点を形成し、得られた成果を日本国内の歯学部に波及させる事により、新潟大学歯学部・大学院医歯学総合研究科（歯学系）の持続的な改善・発展を図ることを目的としています。

新潟大学 ネットワーク型教員組織の構築によるレジリエンスな教育研究拠点の形成



・現代社会に対応する実践的口腔医療人育成プログラム — 組織体制整備と質保証に裏付けられた教育改革 — (継続事業)

◇施設整備補助事業

・校舎改修（歯学系E、E'棟）（平成26～27年度2年目）

大型改修第3期工事として要求していたものが認められ、約6,000㎡の改修工事の継続が認められました。本年夏の竣工を目指します。

このほか、新規プロジェクト事業に関連して、平成26年度国立大学改革強化推進補助金特定支援型「優れた若手研究者の採用拡大支援」により特任教員（年俸制）3名が配置されました。本事業は硬直化した人事制度の解消、若手人材の登用を目指すもので、シニア教員から若手教員への転換を図り教育研究の活性化を目指す文部科学省事業です。本学部・研究科でも機能強化の方向性をみずえ、積極的な若手人材の登用、外国人教員の採用を行っていく必要があります。

臨床系基礎実習室の整備完了について

総診技工室（学生技工室）を含む臨床系基礎実習室はE、E'棟に配置されていましたが、大型改修第2期工事の完了により、AおよびB棟に新たな実習室を整備し、供用を開始しました。臨床実習技工室（旧総診技工室）は臨床実習中の学生の動線を考え、B棟4階に、その隣には臨床基礎技能実習室（旧補綴・小児実習室）を、その間に共

同技工室を配置しました。B棟3階にはファントムを備えた臨床基礎実習室（旧保存・矯正実習室）と歯科ユニット10台を設置した歯科行動科学相互実習室（新設）を配置しました。A棟3階には臨床示説室、臨床技能評価室および臨床技能自習室を配置しました。また実習室に不可欠な基盤設備である、バキューム、コンプレッサー等は

旧公用車車庫に配置しました。なお、臨床系基礎実習室の整備完了に伴い、歯学部内に新たに臨床系実習室管理委員会を設置しました。この委員会ではこれら臨床系実習室の管理・運営を行うこと

とし、各実習室の使用方法・日程調整、実習設備の機器更新、将来構想等を審議することとしました。



A棟 3階 臨床示説室



B棟 3階 臨床基礎自習室



B棟 3階 歯科行動科学相互実習室



B棟 4階 臨床基礎技能実習室



B棟 4階 臨床実習技工室

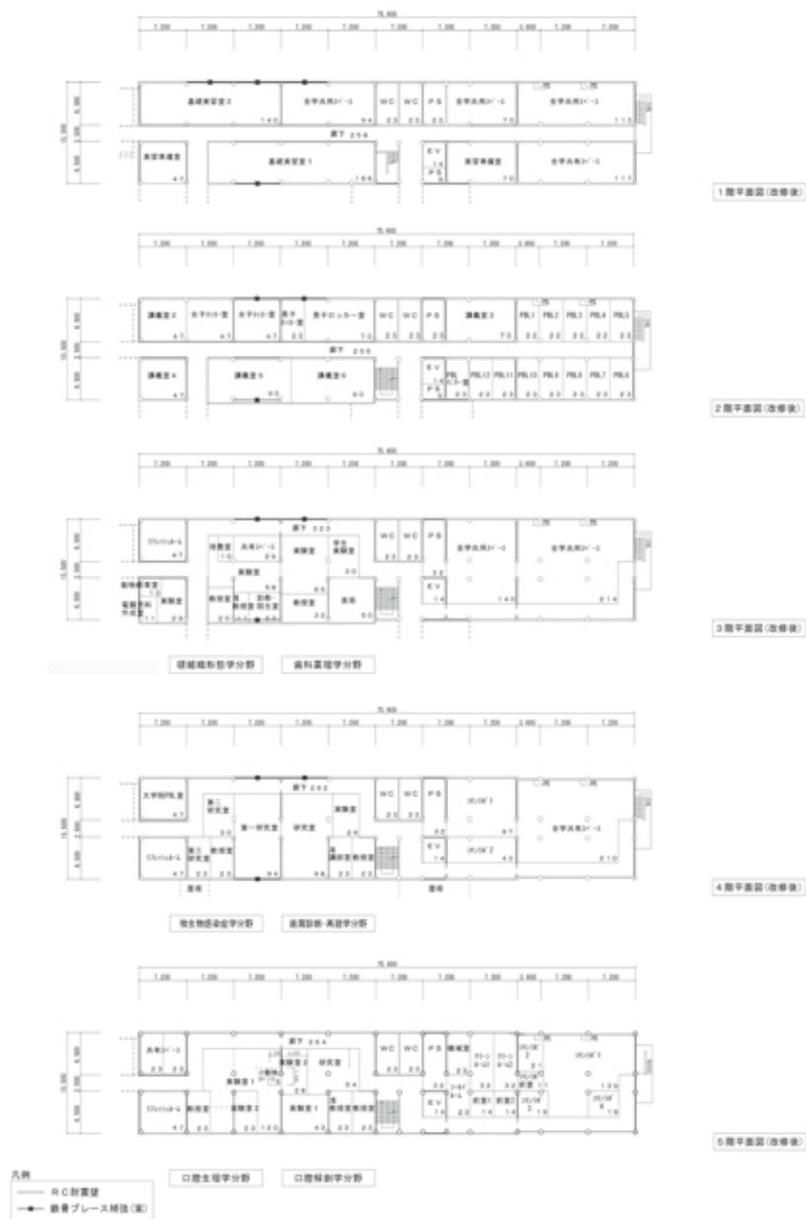


B棟 4階 共同技工室

総合研究棟（歯学系：歯学部校舎） 改修工事（第3期）の開始について

大型改修工事の第3期工事として、歯学部校舎E、E'棟の改修工事が始まりました。E、E'棟の1、2階には講義室、PBL室（12室）、基礎系実習室、学生ロッカー室などの学生ゾーン、3～5階には教員研究室、コモラボなどの研究ゾーンが配置されるとともに、共同研究に資する全学共

同スペースが整備されます。工事期間中は仮移転場所の旧歯学部附属病院からC棟への動線、騒音、振動により、教職員、学生諸君にはご迷惑をおかけすると思いますが、ご配慮のほど、よろしくお願い致します。



E、E'棟改修後配置図

学生との懇談会の開催について

平成26年11月25日の17:00から、学部長、学務委員長及び関係事務職員と歯学部学生との懇談会が開催されました。話題は「校舎改修中における学生からの要望等について」で、学部長からの話題提供、小野学務委員長からの歯学科新カリキュラムの概要説明の後、学生からの要望などについて意見交換が行われました。

学生からの要望事項として、カリキュラム、個別授業、国家試験、校舎・教室、課外活動、キャンパス内施設等、多岐にわたりました。要望が強かつ緊急性の高かった学生アメニティーホールへの電子レンジの増設、口腔生命福祉学科教室の

掃除機の設置に関しては、既に対応を済ませました。個別授業に関して、学生諸君から「教員自身の研究内容や教育方針に固執している」、「学生の理解度を確認せずに授業を進行したり、時間外の拘束を当たり前とした授業運営は疑問」といった厳しい意見も出され、学務委員長を中心とした学務委員会で改善策を検討することとしました。また、休日の校舎内への入構希望が寄せられましたが、学部長からは「セキュリティの関係で難しいので、図書館を利用して欲しい」、「C棟7階の自習室に加え、A棟に学生自習室を新設したので、活用して欲しい」の発言があった。



学生との懇談会の様子



整備した自習室



要望により整備した電子レンジ



要望により整備した掃除機

留学生交流支援制度（短期受け入れプログラム及び短期派遣プログラム）の採択について

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）が公募していた留学生交流支援制度の採択結果が通知されました。この事業はこれまでショートステイ・ショートビジット（SSSV）事業として展開されてきましたが、一昨年度より、新たに留学生交流支援制度として発足したものです。歯学部から単独事業として1件、連携事業（新潟大、東北大、広島大）として1件応募し、短期派遣事業（短

期研修・研究型）として「歯学部学生の世界展開力涵養支援によるグローバル人材育成プログラム」、「3大学歯学部協働による国際歯科医療人育成プログラム」の2件が採択されました。

なお、本事業による奨学金受給には各種制限が設けられており、特に成績不良の学生には奨学金を支給できないこととなりましたので、短期留学希望者は成績向上に努めるようお願いします。

日本学術振興会学術システム研究センタープログラムオフィサー就任について

平成27年4月1日付で前田健康教授が日本学術振興会学術システム研究センタープログラムオフィサー（医歯薬学専門調査班専門研究員〔歯学〕）に選出されました。専門調査員は日本学術振興会の事業に対し、審査体制に関する提案・助

言、審査委員等の候補者案の作成、審査・評価結果の検証・分析、顕彰事業における予備審査、専門調査班会議、審査会等への出席、学術研究動向に関する調査・研究等の業務を担当します。任期は3年間。





転任に よせて

う蝕学分野
興地隆史

平成27年1月1日発令により、東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科口腔機能再構築学講座歯髓生物学分野（旧歯科保存学第三講座）教授を拝命し、13年6ヶ月にわたってお世話になりました新潟大学歯学部を離れることとなりました。貴重な紙面をお借りして、ここに転任のご挨拶を申し上げます。

新潟大学歯学部には、設置後間もない歯学部附属病院総合診療部教授として平成13年7月に着任しました。当時すでに「歯学教育改革」がキーワードでありましたが、この社会の要請に応えるべく、臨床実習や卒後臨床研修の実施システムの構築・整備に携わるとともに、臨床歯科医学全般の教育と臨床にも従事いたしました。この間、講座間の縦割り体制に「横串をクロスさせる」バランス感覚を多少なりとも涵養できましたことは、大変貴重な経験であったように思われます。

その後、平成15年10月よりう蝕学分野を担当し、細田裕康教授、岩久正明教授が築いてこられた保存修復学の先端的業績に、私の専門である歯内療法領域をも付け加えることを目標として、その運営に取り組んでまいりました（その実際については、本誌平成23年1号にも寄稿させていただきました）。その結果、臨床面では、歯科用実体顕微鏡やNi-Tiロータリーファイルなどの先端的器材の導入により効率化・難症例対策の両面で進歩を図ることができたと自己評価しています。また研究面では、バイオロジーとバイオマテリアルサイエンスを二本の柱とし、さらに臨床との連携を原点かつ目標としながら、歯髓の創傷治癒と再生、覆髓用新規ケイ酸カルシウム系バイオマテリアル、歯髓炎・根尖性歯周炎の免疫病理、口腔バイオフィルム制御などに関する幅広い内容を手掛

けることができました。ここに至るまでの教室スタッフ一同の多大な協力には感謝致しております。

さらに平成22年4月からは医歯学総合病院副院長（歯科総括担当）を拝命しました。一期目の三年間は外来診療棟新営への対応に追われたかの感がありますが、多くの方々のご尽力に支えられ、設計、移転（平成24年11月）とその後の整備を進めることができました。その結果、移転前後各1年間の比較で、チェア一台数が約2/3に減少したにもかかわらず、診療単価が同等のまま患者数が約一割増加するという実績が得られました。外来診療に関わる全ての皆様のご協力の賜物であることは言うまでもありませんが、部署間の壁を排した設計、診療ブロック制、チェア共同使用などの新しい運用コンセプト（本誌平成25年1号もご参照下さい）が誤りではなかったことには、心底安堵したものです。

う蝕学分野はすでに改修・移転が完了しており、その運営についても、約10年を経てようやく臨床、研究、教育とも安定して業績を重ねることが可能となったと自己評価いたしております。このような矢先での転任となりましたことには、「安住の地を去る」かのような複雑な想いを禁じ得ません。病院の運営についても、医科歯科連携診療体制の構築などの案件を抱えた中での任期途中の退任となり、高木律男現総括副院長をはじめとする関係各位には大変心苦しく思っております。

現在の新潟大学歯学部は、前田健康歯学部長の強力なリーダーシップのもと、わが国で最も「勢いのある」歯学部の一つであるといっても過言ではありません。現在進行中の歯学部校舎の改修が類を見ないほどの規模であることは、とりもなおさずこの「勢い」が評価された結果でありましょう。この発展を肌で感じる事ができた経験を糧として、転任先においても教育・研究・臨床に鋭意取り組む所存です。ご指導・ご鞭撻を賜りました多くの方々に深く感謝いたしますとともに、新潟大学歯学部の更なる発展を心からお祈り申し上げます。

海外活動

口唇裂・口蓋裂を中心とする 口腔外科手術に関する医療支援

顎顔面口腔外科 児玉泰光

2014年12月20日からの5日間、新潟大学歯学部（以下、本学）とUniversity of Dental Medicine, Yangon, Myanmar.（以下、ヤンゴン歯科大学）との姉妹校提携に基づく「口唇裂・口蓋裂を中心とする口腔外科手術に関する医療支援」に、顎顔面口腔外科の高木教授、歯科麻酔科の瀬尾教授、弦巻先生とともに参加させて頂きました。本稿をお借りして、その活動内容を報告させて頂きます。

ミャンマーの歯科医療と口蓋裂治療

ミャンマー（旧ビルマ）は、日本の1.8倍の国土に約5000万人を有する東南アジアの仏教国で、地図上ではインドの右隣に位置します。2010年の軍事政権崩壊以降、民主化が急速に進み、バブルを思わせるような街の賑わいがある一方で、格差の拡大（低所得者）が社会問題となっているそうです。歯科医師は、10万に約5人（日本72人、新潟県90人）と絶対的に不足しており、口腔外科医はさらに少ないとの事でした。ヤンゴン（最大の都市）とマンダレー（第2の都市）にそれぞれ歯学部があり（年間約150人が卒業）、口腔外科を標榜する病院は2つの歯学部病院を加えても4病院との事でした。口蓋裂治療に関しては、日本で行われているような一貫した治療体系はなく、言語治療や矯正治療も一般的ではないそうです。多くの症例で、医療費や通院費など様々な理由で術後

の経過観察が行われず、退院が治療終了となる場合がほとんどの事です。ミャンマーにおける口蓋裂治療は、これまでは国際医療支援によって支えられ、2000年を過ぎた頃からようやくミャンマー人歯科医師による口蓋裂手術が始まったそうです。ミャンマー人医師（形成外科）によっても手術は行われていますが、手術件数が症例数に追いついていないのが現実との事でした。ヤンゴン歯科大学では、年に数回、今回の我々のような国際医療支援（韓国チーム、日本チームなど）を受け入れる形で口蓋裂関連手術が行われており、その中で、技術の移転、スタッフ教育、医薬品や医療器具の寄付などが20年近く続けられています。

出発から術前診察まで

この医療支援が正式に決まった後、高木教授と瀬尾教授がヤンゴン歯科大学を視察し、日本と同じレベルの手術を提供するためには何が必要か？どのような周術期管理を行うべきか？といった検討がなされました。そこで、医薬品（特に静脈内投与用抗菌薬、口蓋裂で用いる特殊な縫合糸、麻酔器材や麻酔薬など）が恒常的に不足していることから、口腔外科麻酔科同門会の先生方や関連企業に寄付金を募って購入するとともに、手術器材や器具、麻酔薬などは各方面に医療支援の主旨を説明して確保することになりました。また、これらの外国への持ち出しに関しては、航空会社や大

使館、関係する役所などと入念な打ち合わせを行いました。その甲斐もあり、必要とする物資は出発の5日前に段ボール10個にまとめることができ、12月19日にいよいよ出発となりました（写真①）。現地到着の翌日の12月21日には、朝から症例検討と術前診察を行いました。今回の口蓋裂疾患に対する医療支援（無償手術）の開催は、事前にヤンゴン歯科大学から新聞などで広報され、希望者から選抜された1歳2か月から37歳までの23名の術前診察を行いました（写真②、③）。日本での口唇形成手術は生後6か月が一般的ですが、手術予定の症例には7歳の両側性唇裂の男児も含まれており、この年齢まで手術に至っていないミャンマーの社会的環境、発展途上国における医療の状況を実感させられました。また、ビニールシートが巻かれたマットが置かれただけの病床（写真④）、必要最低限の器機しか備わっていない

手術室（写真⑤）、過去の国際医療支援で各国から提供された手術器具、とりわけピオクタニン（切開線を印記する液体）の入れ物がウイスキーキャップで代用されていた事などは、とても印象的でした。



③術前診察



①出発前の成田空港



④病室



②症例検討



⑤手術室

手術

12月22日から24日までの3日間は、我々のチーム日本（新潟大学）とチームミャンマー（ヤンゴン歯科大学）とに分かれ、2つの手術室を使って8時30分から並列で手術が行われました。チーム日本は、各日3例、4例、3例、内訳は口唇形成術7例、口蓋形成術2例、顎裂部腸骨移植術1例、計10例の手術を担当し、全身状態が悪く延期となった1例を除いた残りの12例をチームミャンマーが担当しました。全身麻酔の導入と挿管は、瀬尾教授と弦巻先生の阿吽の呼吸で難なく終了し（写真⑥）、いよいよ記念すべきチーム日本の初手術が開始されました。ヤンゴン歯科大学のスタッフは、高木教授のメスの運び、縫合針を置く位置、縫合糸の強さ、その全ての動きを目に焼き付けるように凝視し、常に高木教授の背後には沢山の見学する先生の姿がありました（写真⑦）。また、器械出し（scrub nurse）との連携に始めは苦



⑥麻酔導入



⑦手術（第1例目）



⑧全手術終了
（ヤンゴン歯科大学口腔外科
Prof.Win Naing、Scrub nurseと）

勞しましたが、徐々に器具のやり取りもスムーズとなり、最終日には三角弁の頂点が合わさる度に「beautiful!!」と言ってもらう程に打ち解け、終始順調に手術を進める事が出来ました。手術中に停電や酸素配管の圧力低下などのトラブルも起きましたが、予定されていた手術が全て安全に終わった時には、何とも言えない充実した気持ちとなったのを、今でも記憶しています（写真⑧）。

医療支援を終えて

昨今、一部で無計画な国際医療支援が増え、先進国の心無い医療者による「サファリサージェリー」と、現地民に擲擻される事例もあるそうです。しかし、今回、最終日の夕食時、ヤンゴン歯科大学のスタッフから「来年はいつにしようか？」と話があった瞬間、今回の医療支援の成功を確信することができました。さらに、口蓋裂関連手術の周術期管理、手術法や手術時期の違いによる形態観察など、医療支援を永続的に行うことで実現可能な共同研究についても意見交換ができた事は大きな収穫でした。次に考えなければならないことは、この経験をどのように本学に活かすか？です。ここ数年、本学では日本学生支援機構（JASSO）の留学生交流支援制度（SSSV）を利用した海外の歯科大学への短期留学が可能となっていますが、希望者殺到ではないと伺っています。本学で質の高い教育を受け、その実力を遺憾なく発揮できるチャンスであることを、学生達はまだ気づいていないようです。本学のミッショ

ンでもあるグローバル化社会で活躍できる歯科医師の養成に繋がるよう、こうした国際医療支援が本学でも行われている事、また、卒後もこうした活動を通して国際感覚を養えるチャンスがあることを積極的に発信してゆくことが、ある意味で最も大切なミッションと感じます。一方で、我々も単に無償手術を提供し、感謝して頂くことに甘んずることなく、共同研究を立案し、寄付を頼らず外部資金を調達するなど、質の高い医療支援をさらに目指すことが必要と思います。

最後に、「口唇裂・口蓋裂を中心とする口腔外科手術に関する医療支援」が、ミャンマーの口唇裂・口蓋裂治療の改善・発展に貢献することは言うまでもありませんが、そこで生まれる信頼関係から両学部の交流がさらに発展し、将来、世界で活躍する歯科医師が新潟大学歯学部から増える事を期待して止みません。

謝辞

今回の医療支援に際し、多くの方々から物資や金銭的な援助を頂きました。改めて、心から感謝申し上げます。また、年末の忙しい時期の海外出張となり、口腔外科・歯科麻酔科の先生方、外来病棟の医療スタッフには様々なサポートをして頂きました。加えて、吉田事務室長をはじめとする歯学部事務の皆様には、煩雑な手続きなど全て対

応して頂きました。ご協力頂きました全ての関係者の方々に、この場を借りてお礼申し上げます。



⑨術後、病棟で



⑩術後、病棟で

SCRП報告

2014年度SCRПを終えて

歯学科3年 鹿間優子

8月20日に歯科医師会館にてStudent Clinician Research Programが、開催されましたので、ご報告いたします。

SCRПとは、各大学により選抜された歯学部所属の学生が日々の研究成果を発表する場で、持ちブースで審査員への説明および質疑応答をすべて英語で行うという研究発表会です。本年度は基礎部門において「Purification of Large Molecular Weight Protein Complex Containing Klf4」というテーマで発表させて頂きました。メンバーは歯学科5年佐藤、目黒、口腔生命福祉学科4年西川そして私、鹿間を含め4人で、歯科薬理学分野佐伯教授ご指導の下約半年間研究に励みました。

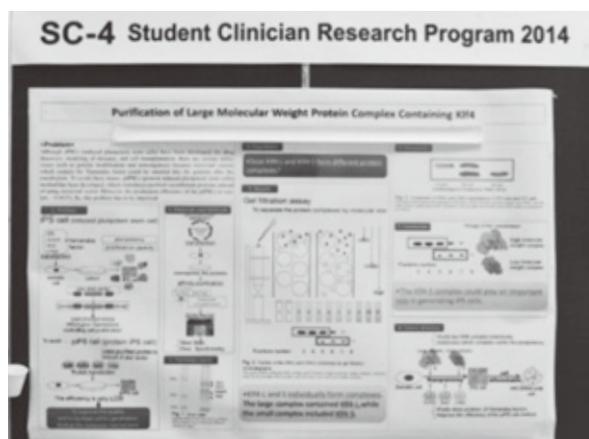
具体的な研究内容についてですが、本研究では近年難治疾患治療への応用が期待されているiPS細胞についての解析を行いました。初期化に必要な遺伝子産物すなわちタンパク質を細胞の外から導入する手法を利用したprotein iPS細胞にまず

注目し、そして、4つある初期化遺伝子の中でも特にKlf4に着目しながら初期化関連タンパク質について研究しました。さまざまな実験の結果、Klf4は大と小の2種類の複合体を作り、分子量の小さいKlf4複合体が初期化に重要な働きを持つことを見出しました。

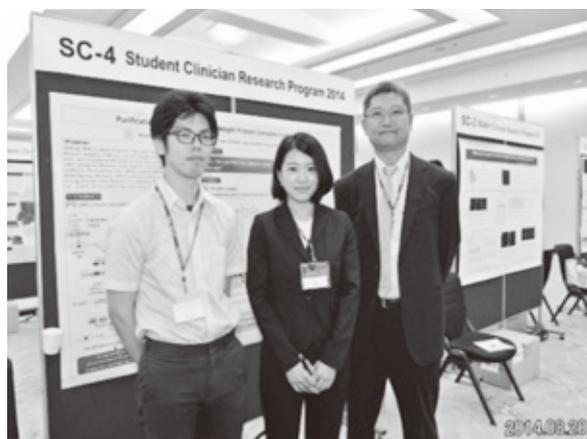
今回の研究活動では期待を上回る結果を得ることができ、非常に楽しく取り組みました。困難が立ち足る時もありましたが、研究の方向性や結果を議論し合った時間は本当に有意義でした。そして何より、私達の研究が一つの発見に繋がった事を大変嬉しく思っています。

私達歯学部生には、歯科医学における基礎教育と臨床教育両方を受ける機会があります。授業を受け基礎研究に興味を持ったとしても腰を据えて取り組める機会はありません。さらに発表する機会についてはなおさらです。このSCRПは、研究活動を行い、内容をまとめ発表しさらに評価を頂ける又とない経験を得ることができる大会です。少しでも興味のある後輩達には是非勇気を持って挑んで欲しいと思っています。

最後になりましたが、SCRП参加に関しご指導頂きました先生皆様方に深く感謝致します。



実際に発表したポスター



応援に駆けつけてくださった先生方と記念撮影

短期留学を体験して

短期留学を経験して

口腔生命福祉学科1年 濱野美咲

私は、今回人生ではじめて日本学生支援機構（JASSO）による留学生交流支援制度プログラムの一環として、短期留学のプログラムに参加しました。まず、私がこのプログラムに参加した理由は3つあります。1つ目は、一度は留学経験を大学生のうちにしておきたかったからです。2つ目は、歯学の知識や英語力は未熟ですが、早いうちに海外に出て、海外の医療の現場や日本との違いを自分の目で見ることにより、これからの学校生活や人生に活かせるものを見つけ、かつ身に着けたいと思ったからです。3つ目は、控えめで面倒くさがりの自分を変えたかったからです。このような思いを抱いて、私はタイにあるチェンマイ大学へ、2週間派遣されました。この2週間という短期間に、私はここでは書ききれないほどの多くのことに触れ、また学ぶことができました。大学内のデンタルクリニックの様々な科を見学させていただき、タイではレジンだけでなくアマルガムでの充填を行っていること、日本と比べてクリ

ニックの人々は軽装であることなどを知ることができました。また、タイの学生たちとの交流や観光、プランテーションプロジェクトへの参加をしたことにより、タイと日本の大学生の勉強意識の違いや、タイの文化に触れることができました。この留学を通して、私が最も驚いたことがあります。それは、タイの人々の自分の歯や歯科に対する意識です。私は、日本のように毎日歯磨きをしたり、定期健診などが行われていると思っていましたが、そうではなかったのです。タイの人々の中には、様々な理由がありますが、主に経済的理由で、歯磨きを毎日当たり前にできなく、歯科医院に通うお金もない人がいるということを知りました。そして、日本は恵まれている国だと改めて感じました。

この短期留学に参加したことにより、自分を少しですが変えることができたと思いますし、一方で英語力や自主性、歯科知識の不足にも改めて気づくことができました。この経験は、これからの人生にきっと活かしていきたいと思います。とてもためになる貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。



タイの動物園にて。右側が筆者。



タイの有名な観光地にて。右側が筆者。

タイ・チェンマイ大学訪問記

歯学科4年 横 関 麻 里

私は日本学生支援機構（JASSO）による留学生交流支援制度プログラムの一環として、昨年の8月にタイのチェンマイ大学を訪問させていただきました。

学生のうちから海外の歯学部を訪問してもらうことができるなんてこんな良い機会はない！時間がある今のうちだ！と思ったのと、以前にタイへ留学に行った同期の勧めで、チェンマイ大学の短期留学に参加させていただくことを決めました。

プログラムでは、大学病院の様々な診療科の見学のほか、障害者施設での保健指導、大学職員の方と一緒に奉仕活動の一環としてプランテーションを体験しました。

病院見学の中でも印象的に感じたのは、学生の臨床経験がとても豊富であるということです。タイでは4年生から臨床実習が始まります。そのため、私と同じ4年生がもうすでに患者さんを治療していました。口腔外科に行った時には、6年生の学生が患者さんの抜歯を3本連続全て一人で行っていました。このように学生が積極的に治療に取り組んでいる姿に驚いたと同時に、刺激も受

けました。また、学生が書いた患者さんのカルテを見せてもらおうと、治療方針が全て英語で書かれていました。私も4年生では何回か英語論文を読む機会がありましたが、歯科専門用語の英語の訳にとっても苦労しました。それを思うと、歯科の専門分野の英語に日頃から触れるというのはとても良い取り組みだと感じました。

短期留学では、学業の他にタイの文化にも触れることができました。ゾウに乗ったり、バイクの2人乗りをしたり（ローマの休日を観て以来ずっと憧れていた）竹でできたボートで川下りをしたりと、日本にいる時よりもアクティブに活動していました。川下りをする時、濡れてもよい恰好で来てねと言われ、何となくサッカー日本代表のTシャツを着て行ったのですが、異国の地で自国のユニフォームを着て出歩くことがこんなにも恥ずかしいのかと痛感しました。

この2週間、日本を飛び出したからこそできた素敵な出会い、経験がありました。その間支えて下さった多くの方々には本当に感謝しています。自分と同じ、歯科医師を目指す海外の学生がどのようなことを学び、どのように取り組んでいるかを見ること、知ることができ、とても刺激を受けた2週間でした。タイで感じたことを忘れず、これからも勉強に励みたいと思います。



チェンマイ大学のロビーにて。右が筆者。



チェンマイの学生と。前列中央が筆者。

短期留学を経験して

歯学科4年 小山 祐 平

私は日本学生支援機構（JASSO）による留学生交流支援制度（SSSV）の一環として、8月4日から16日までの12日間、台湾・国立陽明大学に短期留学させていただきました。この度、歯学部ニュースへの短期留学について報告の機会をいただけましたので、この場をお借りしまして、ご報告させていただきます。

まずは、簡単に台湾について。意外と日本人の中には、台湾を中国本土と一緒にしてしまっている人がいるようですが、台湾の正式名称は中華民国。同じ中国でも全く異なります。と私たちのお世話をしてくれた、私と同学年の陽明大学の学生が力説してくれました。彼は、3月に起きた学生による立法院（日本で言う国会議事堂）占拠事件（台湾では、ひまわり運動と呼ぶ）に参加したほど、アクティブな学生でした。

さて、台湾・国立陽明大学での短期留学プログラムは、台北市にある榮民總醫院（Veteran General Hospital）において、実際の治療を見学するというものでした。

この榮民總醫院は、もともと退役軍人（榮民）のために設立された病院で、1日の外来患者は1万人、病床数は3千床、医師数は1千人、スタッフは5千人と、日本の病院では考えられないほど、台湾の大規模な病院の一つです。

この病院の歯科には、歯周病科、矯正歯科、歯髓病科、小児歯科、総合診療科、口腔外科、補綴科の7診療科あり、この7診療科を8日間かけて見学させていただきました。私は4年生になり、臨床系科目の座学や実習で学んだことが、実際の臨床現場で見学を通して学ぶことができたことは、大きな収穫であったと思います。

また、歯内療法学や補綴学、歯科矯正学など、後期から実習が始まった科目についても、実習している今となって、当時どのような目的でどのような治療をどのように行っていたのかよく理解できます。

さて、病院見学後の時間や休日は、陽明大学の同学年の主に7人の学生を中心に、日替わりで、私たちを台北市のみならずその周辺の街に案内してもらいました。まさに、至れり尽くせりです。台北市内であれば、士林夜市をはじめとするナイトマーケット、台北101、中正記念堂、故宮博物院、總統府、九份、平溪線など様々な場所に連れて行ってもらいました。やはり、印象に残っているのは、九份でしょうか。ここは、誰もが知っているあのジブリ映画のモデルとされた、台湾でも有名な観光地であり、多くの人で賑わっていました。

今回の短期留学を通して、ここでは書ききれないほどの貴重な経験ができ、非常に大きな収穫でした。また、自分の英語力の無さを改めて痛感するいい機会にもなりました。

最後になりましたが、このような充実した短期留学ができたことに、両校の歯学部の先生方、学務の方々に改めて感謝申し上げます。



陽明大学の学生と。筆者は右から3番目。



ジブリの映画のモデルにもなった台湾の観光地「九份」。

短期留学を経験して

歯学科6年 吉原 翠

昨年8月、日本学生支援機構（JASSO）による留学生交流支援制度（短期派遣）プログラムによりタイのコンケン大学を訪問させていただきました。

コンケン大学はタイの東北部に位置する都市であり、コンケン大学は17の学部を持つタイ東北部最大の国立大学です。

コンケン大学では2週間滞在し、歯学部附属病院の見学を中心とした実習をさせていただきました。

新潟大学では、5・6年生が臨床実習として総合診療部で診療しています。先生方をはじめ、病院のスタッフの方や患者さんの多大な協力の下で実習が行われています。

一方、コンケン大学では4年生から臨床実習が始まります。学生が行う治療の範囲も日本に比べて幅広く、見学した診療科の多くで学生が診療に参加していました。

このような違いの生じる背景には、タイでは患者さんの支払う治療費が学生と歯科医師の診療で異なるということがあります。学生の診療はより安い価格で受けられるのでそれを選択する患者さんも多く、学生の経験する症例数も多くなります。

日本でタイと同じ制度を取り入れることは難しいと思いますし、それが望まれているのかもわか

りません。ですが、タイに行くまでそのようなシステムを知らなかったのが、とても興味深く思いました。

コンケン大学では多くの方に大変お世話になりました。2週間のうち、日中は病院を見学していましたが夕方以降は学生や先生方が夕食などの面倒を見てくれました。休日には動物園や寺院に行き、タイの文化に触れる機会を多く与えてもらいました。先生や学生とは英語で会話することがほとんどでしたが、自分の拙い英語を理解しようと努めてくれたことに非常に感謝しています。また、英語だけでなく、海外からの学生に積極的に関わっていく姿勢も見習いたいと思いました。

最後になりますが、この場をお借りして海外短期派遣のために尽力してくださった先生方に感謝の意を申し上げます。ありがとうございました。



コンケン大学の学生が、休日に湖に連れて行ってくれました（左側が筆者）。

歯学体報告

歯学体報告 ゴルフ部

歯学科3年 神野 愛

歯学部ニュースをご覧の皆様、はじめまして。歯学部ゴルフ部部長の神野愛と申します。今回、この「歯学部ニュース」におきまして、歯学体での結果報告をさせていただく機会を頂けたことを、大変嬉しく思います。

平成26年度の歯学体は、8月4日から6日に北海道恵庭市にある「恵庭カントリー倶楽部」で行われました。最近の若い世代は、残念なことに、昔に比べゴルフをしなくなったため、ゴルフ人口は減少しているそうですが、歯学体では総勢274名のもの学生が真剣にプレーに取り組んでいました。新潟大学からは、4年生から男子2名・女子1名が参加しました。大会当日は、天候に恵まれず、雨風のなか、選手たちにとってはとても苦しい試合になりました。しかし悪天候の中でも選手

たちのプレーは、ルールやマナーを守りながら、まるでプロのような本格的な試合でした。実際に何人かの選手は、幼い頃より練習を積み、中にはゴルフ留学をしていた選手もいたそうです。そのような強豪ぞろいの試合において、4年の竹澤みなみ選手が1日目76(39・37)、2日目76(39・37)という素晴らしいスコアを叩き出し、優勝しました。竹澤選手は、現在4連覇と華々しい活躍をしております。平成27年度の歯学体は愛知県での開催となりますが、今後も連覇を狙う竹澤選手をはじめ、部員一丸となって試合に臨みたいと思います。

現在、歯学部ゴルフ部は男子8人、女子7人の計15人で、毎週月・水曜日に県庁の近くにある「日経ゴルフガーデン」で活動しています。練習内容は、一人百球の打ちっぱなしをメインに、他にもパター、アプローチの練習を行っています。部員の多くは、ゴルフの未経験者ですが、先輩方をはじめ、コーチの石田先生が一人一人丁寧に指



日経ゴルフガーデンにて。上段左から2番目が筆者。



平成26年度の歯学体にて
現在4連覇中の4年竹澤選手

導してくださるので着実にプレー技術の向上を図ることができます。また、新発田市にある「フォレストカントリー倶楽部」さんのご好意で、不定期ではありますが、実際のコースで練習をさせていただくこともあります。そして毎年、ゴルフ部OBの先生方や歯学部内の先生方を招いて学内戦や、歯学体に出場しております。また、ゴルフ部では随時新入部員を募集していますので、興味のある方は気軽にゴルフ部員にお声かけください。

最後に、毎年多くのご支援を頂いております、OB会の方々をはじめ、顧問の高木先生、元顧問の大橋先生、コーチの石田先生、いつもお世話になっている重谷先生、山中先生にこの場をお借りして改めて感謝を申し上げます。これからもゴルフ部をよろしく願います。

バレー部歯学体報告

歯学科4年 森 昂 大

歯学部バレーボール部は、今年度8月5日から8日までの4日間、私たち新潟大学の主管のもと、地元新潟の西総合スポーツセンターと黒崎体育館を会場に、歯科学学生総合体育大会（デンタル）を開催させていただきました。大会開催に際しましてご尽力いただきました、顧問の瀬尾憲司教

授、バレーボール部OB・OGの皆様には、この場をお借りしまして御礼申し上げます。

僕が歯学部バレー部に入り4年が経ち、毎年デンタルには参加してきましたが、今年度の大会はその中のどれよりも「異質」であって、でもそのどれよりも「充実」したものだだと思います。

「異質」の理由は、やはり新潟大学が主管校となったことで、大会運営という大きな仕事を任されたことです。昨年度のデンタル会場で、次期主管校を決定するくじを引き当ててしまってから、会場となる体育館の予約、審判員へのご依頼、各大学との連絡など、仕事は立て込み時間はすぐに過ぎていきました。正直、それらの仕事をしているときは、大変で嫌になることも多かったです。今振り返ると、どれもが良い経験になったように思えます。僕がこれらの仕事を通して一番感じたことは、普段は一大学生である自分も世間一般から見れば一社会人であり、だからこそ一社会人として責任ある立場にあるということです。約一年の大会準備の間、新潟市職員の方々やデンタルを共催していただいた観光会社の方々など、数多く関わらせていただく機会がありました。そのような方々と、一緒に大会準備を進めさせていただくなかでは、大変なご迷惑をおかけしてしまったこともありました。その時には、社会で長い間働いておられるそのような方々と比べ、自分の社会人としての思慮の浅さを痛感させられました。つい学生だと思つくと、ミスをして許されると甘えてしまいがちです。しかし、自分と同じ年の人の中には、就職して働いている人もいます。そう思うと、当たり前のようなのですが、世間の中では自分もまた一社会人とみなされて当然であり、社会人として、相手のことを考え、自分の行動に全て責任を持たなければいけないと改めて感じました。

そんなこんなな準備期間の一年でしたが、それらをこなしていく日々は「充実」していました。今回の大会は、大会準備に加えて、自分たちのチームが勝つための練習をしたり、また学生として歯学部の授業面では保存や歯冠修復といった専門科目の実習がはじまったり、テストがあったりと本当に忙しいときもありました。でも、忙しい

中でも、部活の練習後にはご飯に行ったり、練習試合や大会後には飲みに行ったり、夏には海で浜コンをしたりと、オンとオフを切り替え、その忙しさの中で過ごす日々は充実していました。

ここ数年バレー部には、プレーヤー、マネージャーを含め多くの新入部員が入り、活気にあふれるようになりました。さらに練習には、お忙しい中、OBの先生方も参加してくださり、より幅広い練習ができるようになりました。そんな環境で、チームとしても力も少しずつ向上していくのが感じられました。そして、満を持して迎えたのが今回の地元新潟開催のデンタルでした。多くの

OBの先生方や友人など、たくさんの方々が応援にきてくださった中で、臨んだ今大会でしたが、結果は男子部、女子部ともに予選リーグ敗退という残念なものとなってしまいました。この結果を通して、自分たちの弱さ、それは単純に身体の弱さもだし、心の弱さもだし、チーム（組織力）として弱さを認識させられました。大会前、自分たちはチームとしての良いところばかりをみて安心し、チームの脆い部分には目を瞑ってきてしまったのだと思います。来年度の大会に向けて、自分たちの長所・短所を見つめなおして、チームとして成長していきたいと思っています。



新潟市西総合スポーツセンターにて。中段右から2番目が筆者。

アメリカ留学報告

歯科矯正学分野 丹 原 惇

歯学部ニュースをご覧の皆様、こんにちは。歯科矯正学分野の丹原（にはら）と申します。2012年12月～2013年9月の9か月間、日本学術振興会の組織的な若手研究者等海外派遣プログラムの支援を頂きまして、アメリカ合衆国・コネチカット州にあります、University of Connecticut Health CenterにVisiting Research Scholarとして留学する機会をいただきました。今回は、その留学期間中の概要をご報告させていただきます。

滞在先のコネチカット州は、アメリカ北東部に位置しており、ニューヨークとボストンのちょうど中間の位置にあります。州都のハートフォードはコネチカット州の中央に位置し、保険会社の本社が世界一多い町として知られております。この州都ハートフォードから、車で西に30分。ファーマントンという非常に自然が多い町（いわゆる田舎ですが）の小高い丘の上にUniversity of Connecticut (UConn) Health Centerのメインビルディング（写真1）があります。キャンパス自体も非常に広大で、建物間はシャトルバスが15分間隔で運行されており、シャトルもしくは自

家用車が無いとキャンパス内の移動は難しいほどでした。

メインビルディングの7階にOrthodonticsの研究室があります。Ravindra Nanda教授（写真2）を中心に、所属スタッフは教員5名、レジデント21名、インターナショナルフェロー数名、秘書2名でした。また、Charles Burstone前教授は矯正治療のメカニクスでは非常に著名な方なのですが、当講座の花田前教授とも親交が深いようで、昭和58年に同門会の講演で新潟大学を訪れていることがお部屋の感謝状から判明しました。ご本人は感謝状が日本語だったため、なんと書いてあるか分からないとおっしゃっていましたが、まさか当講座の同門会からお渡しした感謝状を30年後に受け取った先生のお部屋で拝見することになるうとは思ってもいませんでしたし、何か不思議な縁を感じた瞬間でもありました。基本的には臨床講座ですので、レジデントはほぼ毎日クリニックでのトレーニングがメインでしたが、毎週



写真1：UConn Health Centerメインビルディング

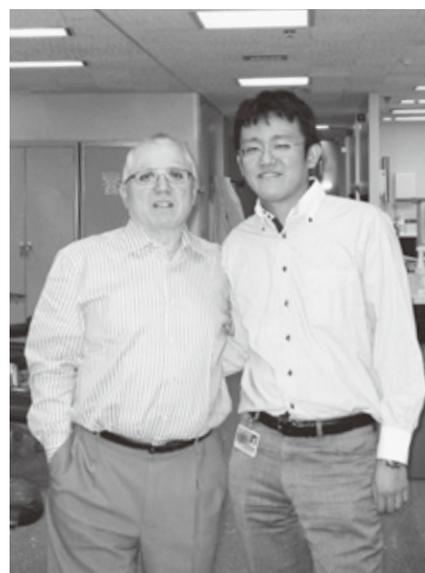


写真2：主任教授Dr.Nandaと

金曜の午前はcase conferenceやセミナーが行われておりました（写真3）。また、毎週火曜日の午後は、Dr.Nandaの患者さんだけをレジデント全員で治療する「Nanda's clinic」となっており、Dr.Nandaからも毎週外来見学に来るよう勧められました。9か月間は臨床から完全に離れなければいけない事を覚悟していた私ですが、むしろ本場アメリカでの矯正治療を毎週見る機会に恵まれました（写真4）。

留学期間が9か月と短かったのですが、結果的には2つの仕事に関わる事ができました。一つは留学前から興味があった齧歯類を使った歯の移動に関する基礎研究です。UConnのOrthodonticsでは基礎研究のラボも自前で持っておりまして、臨床に近い形の歯の移動に関する基礎的な研究も行われており、特に、歯の移動時におけるvibrationと移動スピードの影響に関する研究が数年前から進められていました。私もその手伝い



写真3：case conferenceの休憩時間



写真4：毎週火曜午後のNanda's clinicにて

という形でSectioningやcell countingを教えてもらったり、マウスの小さな歯と格闘しながらスプリングを設置（写真5）したりして、基礎研究に参画する事ができました。

また、以前から有限要素法という工学的な手法を用いたバイオメカニクスに関する研究にも興味があり、当科の齋藤教授が前もってNanda教授にお話ししていただいたおかげで、すぐに准教授のDr. Flavioと研究をスタートする事ができました。この手の研究はソフトウェアが高額でなかなか手に入りにくいのですが、アメリカの大学所属となると話が違いました。教育機関向けには数百万円するソフトを事前登録のみで使えるようになっており、早速ソフトを入手して解析環境を整えました。テーマについてはDr. Flavioと相談して、下顎大臼歯の近心移動の効率的なメカニクスに関する有限要素解析となり、UConn engineeringのエンジニアと共同で研究を進めておりました。この研究結果は、臨床論文として書き上げまして、European Journal of Orthodonticsに掲載されました。

今回の滞在で仕事以外の実りと言えば、やはり海外の友人が増えたことです。UConnのスタッフはもちろん、現地に住む数少ない日本人の方々やお隣に住む青年（配管のトラブルで夜にいきなり助けを求めてきた事もありました）やアパート



写真5：マウスの口腔内に矯正移動用コイルを装着中

のご近所さん、スーパーの店員さんまでいろいろな人とふれあうことができました。妻と息子を連れて行ったためか、皆さん気さくに話しかけてくれるので、どこへ行っても初対面の人とちょっとした会話をすることが多かったように思います。アメリカは子どもを非常に大切にす国柄と言われますが、それを身をもって体験できましたし、そのおかげで急に話しかけられてもあまり驚く事が無くなった気がします。近年はSNS等のコミュニケーションツールのおかげで、滞在中に知り合えた方々と現在も連絡を取り合ったり、お互いの近況も知ったりできるので、昔に比べると帰国後も仕事やプライベートで繋がりを容易に維持する

事ができます。

海外で生活するという事は良い意味でも悪い意味でも想像を遥かに越えた経験でした。互いの国に共通している所、異なる所が少しだけですが知る事もできました。これからはこの経験を生かして、研究・教育・臨床に携わる事ができればと思っております。最後になりましたが、今回の私のアメリカ留学の後押しをしていただいた齋藤教授、留守中、様々な方面でサポートしていただいた医局員の皆様、ならびにたくさんの激励をいただきました方々に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。



学会報告

第35回日本歯内療法学会学術大会報告

う蝕学分野 吉羽 邦彦
実行委員長

平成26年7月12日（土）、13日（日）の両日、第35回日本歯内療法学会学術大会（興地隆史大会長）が朱鷺メッセ・新潟コンベンションセンター（新潟市）にて開催されました。メインテーマ「新時代の歯内療法：エビデンスとアートの融和」のもと500名を超える参加者を得、活発な討論がなされました。

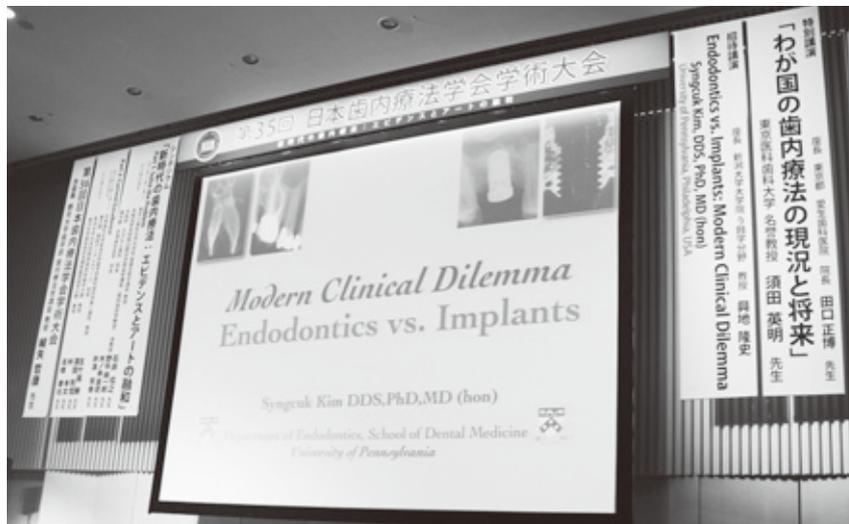
今回の学術大会では、特別講演、招待講演、シンポジウム、倫理セミナーのほか、一般口演、ポスター発表、テーブルクリニック、ランチョン・セミナーなどの盛りだくさんのセッションが設けられました。

大会初日の特別講演では、東京医科歯科大学名誉教授・須田英明先生にご登壇いただき、「わが国の歯内療法の現況と将来」と題してご講演いただきました。現在、極めて多くの症例が歯内療法の対象になっていること、また新規器材・材料・技術の導入が着実に進んでいること、さらに保

険制度の問題等について解説されました。また歯内療法＝根管処置ではなく、歯内療法の基本は生活歯髄の保護が重要であること、さらには歯髄再生療法の可能性についても示され、新時代の歯内療法がさらなる発展を遂げていくための方向性についてお話いただきました。

招待講演には、マイクロスコープを用いた歯内療法の第一人者である、Pennsylvania大学のSyngcuk Kim教授をお招きし、「Endodontics vs. Implants: Modern Clinical Dilemma」と題するご講演をいただきました（写真）。抜歯－インプラントという画一的なアプローチに警鐘を鳴らすとともに、先端的な歯内療法による天然歯保存の可能性を十分に検討すべきことを多くの症例を示しながら解説されました。また歯内療法とインプラント治療の双方の知識・技術を十分に学ぶことの重要性について強調されました。

本大会のシンポジウムは、テーマを「新時代の



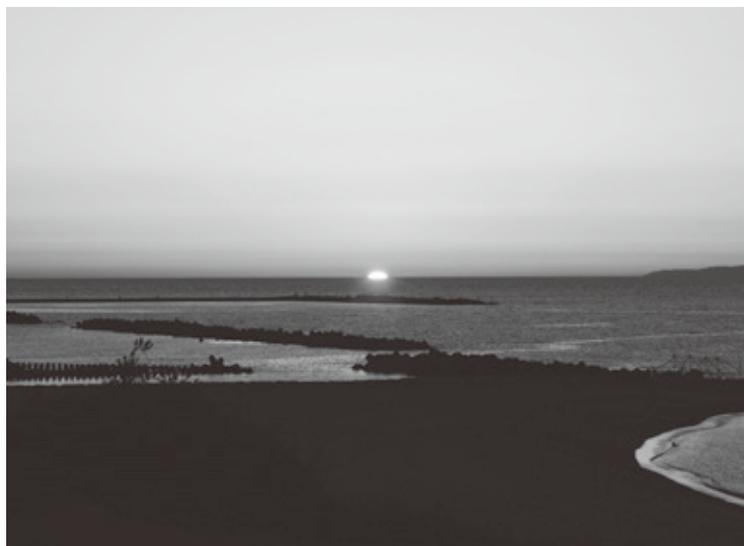
歯内療法：エビデンスとアートの融和」とした二部構成とし、2日間に渡り開催されました。第一部「Solve the Problem」では、歯内療法の成功を阻み続ける因子あるいは難治症例に関連する、細菌感染、根管形態の複雑性、および再根管治療の困難性を取り上げ、これらに対する先端的な対応策について3名のシンポジストにエビデンスとアートの両面から解説いただきました。第二部「Current Excellence」では、歯内療法の発展に関する最先端のトピックとして、画像診断、Ni-Tiロータリーファイル、歯内歯周複合病変への対応、および根未完成歯のrevascularizationに焦点を当て、各方面で活躍されている4名のシンポジストにご講演いただきました。本セッションではシンポジストの一人として本学顎顔面放射線学分野・林 孝文教授に「歯内療法の画像診断」と題してご講演をいただき、歯科用コーンビームCT (CBCT) の歯内療法への応用に関するエビ

デンスとガイドラインについて解説していただきました。

大会二日目に開催された倫理セミナーでは、本学予防歯科学分野・宮崎秀夫教授にご登壇いただき、「臨床研究に必要な倫理的配慮」と題してご講演いただきました。臨床研究への倫理的配慮の意義と重要性について詳細に解説していただきました。

一般口演、ポスター発表ならびにテーブルクリニックにおいても活発な討論なされ、盛会のうちに終了いたしました。新時代の歯内療法へと繋がる情報発信と情報交換の場となった大会であったと思います。

最後となりましたが、本学術大会開催にあたりご後援・ご助成いただきました新潟大学歯学部同窓会、新潟県歯科医師会、新潟市歯科医師会をはじめ関係各位に改めまして御礼申し上げます。



第32回 日本小児歯科学会 北日本地方会大会 および総会 開催報告

小児歯科学分野 齊 藤 一 誠
準備委員長

この度、平成26年10月18日（土）に第32回 日本小児歯科学会 北日本地方会大会および総会を新潟県歯科医師会館において開催させていただきました。当分野教授 早崎治明 先生が大会長、私は準備委員長として、開催準備にあたりました。歴史と伝統のあるこの地方会大会を新潟大学 大学院医歯学総合研究科 小児歯科学分野が担当させていただきましたことを、大変光栄に感じております。

大会のテーマを「小児歯科におけるリスクマネジメント」といたしまして、教育講演では、本学大学院医歯学総合研究科 歯科麻酔学分野教授 瀬尾憲司 先生に「大人の危機管理から見た小児歯科治療の安全性」、特別講演では、日本大学歯学部小児歯科学講座教授 白川哲夫 先生に「小児歯科におけるリスクマネジメントの変遷」という演題でご講演をいただきました。お二人の先生方のご講演は、会員の皆様からとても好評で、小児歯科医療における安全の確保と、これまでの、そしてこれからのリスクマネジメントの取り組みについての理解を深めることができました。衛生士セミナー：認定衛生士必須地方会セミナーでは、「小児のお口のスペシャリストになるためには」とのテーマで、九州看護福祉大学 口腔保健学科 筒井睦 先生にご講演いただきました。筒井先生は当分野にて学位を取得されたご縁もありまして、熊本県より遠路はるばるお越しいただきました。東北大学大学院 歯学研究科 小児発達歯科学分野 福本敏 教授には、ランチョンセミナーにて「う蝕予防の新しい考え方～明確な目標を持ったアプローチとは～」と題してご講演いただきました。

また、日本小児歯科学会専門医認定委員会よりご配慮いただき、大会直後に専門医・認定医セミナーを併催させていただきました。「乳幼児の口と歯の健診ガイド」学会編ができた経緯と解説と

題して、丸山進一郎 先生（アリスバンビーニ小児歯科）、暖かい視線で、社会が求める乳幼児健診に取り組みましょう！-「食」を介した歯科からの育児支援も考えてみませんか-と題して田中英一先生（田中歯科クリニック）にご講演賜りました。

さらに、一般口頭発表、ポスター発表、専門医・認定医更新発表、認定衛生士試験発表で28演題、参加者は230名と盛会裏に終了することができました。

会員懇親会では、新潟大学歯学部長 前田健康教授、私の前職での恩師でもあります日本小児歯科学会 理事長 山崎要一 先生（鹿児島大学小児歯科学分野教授）、新潟県歯科医師会 会長 五十嵐治 先生、新潟市歯科医師会 会長 岡田匠 先生、全国小児歯科開業医会（JSPP）会長 丸山進一郎 先生にもご来席いただき、ご祝辞を賜りました。また、北日本地方会管轄の7大学の小児歯科による医局紹介を行うなど、大いに盛り上がりました（写真）。

このような大会を開催できましたのも、新潟臨床小児歯科研究会の先生方、そして新潟大学小児歯科学分野の医局員の先生方のご協力の賜物と、改めて関係者の皆様に感謝申し上げます。



懇親会会場にて（筆者：上段左端）

平成26年度日本補綴歯科学会 関越支部学術大会開催報告

医歯学総合病院 歯科総合診療部 奥村暢旦
準備委員長

平成26年9月23日秋分の日、秋晴れの下で平成26年度関越支部総会・学術大会（大会長・藤井規孝（新潟大））がチサンホテル&コンファレンスセンター新潟にて開催されました。新潟で開催される際は会場として新潟県歯科医師会館をお借りすることが多い本学会ですが、今回はできるだけ多くの会員の先生方に参加していただきたいという小出馨支部長（日歯新潟生命歯学部）の御意向により、新潟駅に隣接しており新潟市外からも比較的アクセスしやすい本会場を選択したことで参加者は80名を超え、例年になく盛況な会となりました。学術大会は当日午前中という限られた時間ではありましたが、一般口演5題、専門医申請ケースプレゼンテーション1題の発表が行われ、補綴に限らず教育・理工・解剖・顎関節と非常に幅広い内容を網羅しており、活発な質疑応答が行われました。特別講演では小林 博准教授（新潟大）に「生体計測と補綴 デジタルとアナログ」と題して、デジタルとアナログの概念に始まり、アンプやペンレコーダーを用いていた頃と現在の筋電図の信号処理の仕組みや補綴研究の評価、デジタルからネットワークへの広がりなど、大変興味深い講演を頂き、補綴・歯科の分野に留まらない見識の深さを拝聴することができました。

同日に「これからの顎口腔系のリハビリテーションに求められるもの」というテーマの下、支部専門医研修会も併催され、鶴見大学の小川 匠教授より「加齢による顎顔面形態の変化に対応した歯科診療とは」の演題で、残存歯数が増加した一方で多様化した歯列形態の変化や顎顔面形態の変化と、それに応じた咬合や機能の回復について解説頂き、広島大学の津賀一弘教授には「舌圧を指標とする新しい口腔機能リハビリテーション」と題して、高齢者のQOL向上に不可欠であるにもかかわらずモチベーション維持の難しい口腔リハビリテーションにおいて、簡便で客観的な検査法とそれをもとに効果的に口腔機能を鍛える訓練についてご講演頂きました。

日本補綴歯科学会関越支部は、新潟、群馬、栃木の三県に在住する補綴学会員で構成されておりますが、今年度は県外から多数の先生方が御参加下さっただけでなく、それぞれの講演について積極的に質疑応答が行われ、おかげさまで大盛況のうちに会を終えることができました。この場をお借りして、御協力いただいた関係各位およびチサンホテル&コンファレンスセンター新潟斎藤様に御礼申し上げます。



開会の挨拶をされる藤井大会長



一般口演の様子

学会受賞報告

日本歯内療法学会学術大会ワカイ賞

受賞報告

う蝕学分野（歯の診療室）金子友厚



新潟朱鷺メッセ新潟コンベンションセンターにおいて2014年7月12～13日において開催されました、第35回日本歯内療法学会学術大会におきまして、この度ワカイ賞を受賞いたしました

のでご報告させていただきます。演題は、“再生歯髄組織におけるマクロファージの活性化と成熟—血管内皮細胞混合移植の影響—”という歯髄組織の再生に関する内容です。私が、東京医科歯科大学、ミシガン大学、新潟大学を通して培ってまいりましたいくつかの組織学的、分子生物学的実験手法を用いて行った研究で、幹細胞を用いて作成した再生歯髄組織内において幹細胞より分化したマクロファージに関する報告でした。

本学会は、歯内療法学に関する臨床および基礎研究活動を主旨とし、日本歯内療法協会として1980年に設立され、現在に至っております。そして、雑誌“日本歯内療法学会雑誌”を旗艦誌としています。学術大会は、年1回のペースで、日本

各地の主要都市において開催されております。折しも、口頭発表を行った13日は、すぐとなりのメインホールにて、日本の著名なフィギュアスケーターを一同に介したファンタジー“Fantasy on Ice 2014 in Niigata”が開催されており、いつも増してここ新潟が活気にあふれているのを感じられました。

口頭発表では、多数の著名な先生から、多くの質問やアドバイスをさせていただきました。また、発表時間以外にも、何人かの先生とディスカッションすることができ、今後の研究にもとても有意義でした。さらに、好天に恵まれた夕焼けのなか、朱鷺メッセ最上階の展望室で行われた懇親会においても、ずらりと並んだ地酒の酒瓶を肴に、今後の研究について、いろいろとご教授いただき、とても爽り多い学会参加となりました。

最後に、今回の受賞は、当分野の興地隆史教授、東京医科歯科大学須田英明名誉教授、ミシガン大学Jacques E. Nör教授をはじめとするご指導の賜物であります。謹んで御礼を申し上げます。

受賞報告

生体歯科補綴学分野 井田 貴子



2014年7月4日、5日の2日間、札幌にて開催されたThe 9th Congress of Asian Academy Osseointegration (AAO)におきまして、Best Oral Presentation Awardを頂くことができましたので、ご報告致します。

AAOはアジア圏におけるインプラント治療の啓発と発展を目指して、日本と韓国を中心に発足した団体であり、2005年ソウルにて第1回学術大会が開催されて以降、毎年アジア各国で学術大会が開催されています。この度の学会のメインテーマは“Cross Talk on Dental Implants between Basic Science and Clinics”であり、Basic Science、Clinics両テーマに基づいたLectureおよびOral・Poster presentation

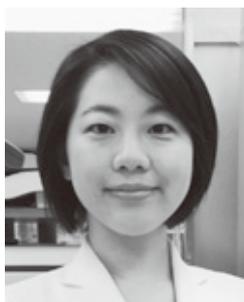
が行われました。今回、私は『Effect of Matrix Collagen Crosslinks on Osteoblast and Osteoclast activities』という演題名で口頭発表を行いました。質疑応答でも有意義なディスカッションが出来、本学会を通じて、非常に貴重な経験ができたと思っております。

本研究は骨質（Bone Quality）が骨代謝に与える影響を解析するものです。骨質は様々な因子によって規定されていますが、中でも骨の機械的特性を規定する上で重要な構造として知られているI型コラーゲンの分子間架橋構造（クロスリンク）に我々は注目し、局所的な骨代謝起点としてクロスリンクが関与している可能性について検討しています。

最後になりますが、今回の受賞は魚島勝美教授をはじめ、指導教員である加来賢先生、生体歯科補綴学分野の先生方のご指導の賜です。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

IADR/Unilever Hatton Divisional Awardを受賞して

歯周診断・再建学分野 大学院 中 島 麻由佳



2014年8月に東京で行われましたHatton Award国内選考会においてIADR/Unilever Hatton Divisional Awardを受賞いたしました。また、同時に第93回IADR Boston大会にて行われるHatton Award最終選考への出場資格を得ることができましたことを、大変嬉しく、光栄に思っております。

発表させて頂いた演題“Oral administration of *P. gingivalis* and alteration of gut microbiota”は、歯周炎が全身に影響を及ぼす新たなメカニズムを明らかにしたものです。

歯周炎は動脈硬化症や糖尿病などのメタボリックシンドローム関連疾患のリスク因子であることが報告されています。これまで、そのメカニズムとして歯周炎組織を介して歯周病原細菌や炎症性サイトカインが血液循環に流入し、全身性の炎症を引き起こすことが考えられてきましたが、はっきりとした証拠は示されていません。

私達の研究グループは以前より、歯周炎が全身疾患を進行させる新たなメカニズムとして腸内細菌叢の変動に着目していました。重度の歯周炎患者さんの口腔内には大量の歯周病原細菌が存在

し、毎日唾液と共に飲み込まれていることから、飲み込まれた細菌が腸管において何らかの影響を及ぼすことで全身疾患のリスクが上昇するのではないかと考えたからです。実際に歯周病原細菌の一つである*Porphyromonas gingivalis*をマウスの口腔へ繰り返し投与したところ、腸内細菌叢が変化すると同時に各組織と全身における炎症及びインスリン抵抗性が惹起されることが明らかとなりました (Arimatsu K *et al.*, *Sci Rep.* 2014)。

今回、マウスへ1回*Porphyromonas gingivalis*投与した後に解析を行ったところ、たった1回の投与によって腸内細菌叢の変動、血清中エンドトキシン活性の上昇等の変化が生じ、さらには体内組織への細菌侵入量が増加していることが明らかとなり、メカニズムの詳細及び歯周病原細菌を飲み込むことの影響力の大きさを明らかにする結果となりました。

今回の受賞を励みに、今後も更に研鑽を重ねてまいりたいと思っております。

最後になりましたが、ご指導頂きました山崎和久教授、多部田康一先生、中島貴子先生ならびに、吉江弘正教授をはじめとする歯周診断・再建学分野の先生方に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

“第41回日本歯科麻酔学会学術集会 下顎骨骨髓炎後の下歯槽神経の変性の 高磁場MRIによる解析” に対して

歯科麻酔学分野 照 光 真

“下顎骨骨髓炎後の慢性疼痛はなぜ非常に痛いのだろうか？”

炎症が消退しても疼痛は持続するので、これは侵害受容性の疼痛ではなさそう。では神経障害性疼痛なのか？ 例えば下顎埋伏智歯を抜歯する際に下歯槽神経（IAN）を損傷し神経障害性疼痛になったとする。症状は、抜歯同側のオトガイから下唇に感覚異常を生じるが、抜歯部位の痛みはみまらずない。一方、下顎骨骨髓炎後の慢性疼痛では逆にオトガイと下唇の感覚は正常で、骨髓炎部位の顎骨深部にうずくような自発痛が持続する。NSAIDsは奏功せず、オピオイドを使用しても十分な疼痛管理が得られないこともある。一体、骨髓炎後慢性疼痛のIANはどうなっているのだろうか？

そこで本学の統合脳機能研究センターと共同して研究を行った。MRI拡散強調画像により水分子の拡散異方性を基にしてIAN軸索を画像化したところ、IANから病的な神経の分枝が歯槽頂方向に伸長する症例が約1/3に認められた。この変形はわれわれの先行研究での神経障害性疼痛には見られなかった。さらにIAN内の水分子の拡散性（単位時間当たりの水分子の拡散面積）の計測では、健側に比して拡散性の低下は約80%に見られ、先行研究における外傷性神経損傷での拡散性上昇とは反対となった。骨髓炎では組織の血流低下があるとされる。虚血性の変化から神経線維の間質容積が低下して、相対的な神経線維密度の増加が拡散性の低下に繋がったと推定される。またT2緩和時間の計測から、炎症性の要因は低いこ

とが示唆された。

では、なぜ特徴的な神経形態変化が生じるのか、細菌や炎症との関連は、動物モデルはできるか、なぜ強い自発痛をだすのか？疑問は膨らむ一方である。同じような疑問をお持ちの先生と一緒に臨床、研究をできれば幸いである。

最後に、この賞をいただくのは3回目となり、歯科麻酔学でイメージングによる研究が認められつつあることをうれしく思っている。



受賞報告

大学院 口腔生命福祉学 岸本 奈月

平成25年9月に兵庫県神戸市にて開催されました日本歯科衛生学会 第8回学術大会において、「経管栄養離脱による口腔内の水分量および微生物量の変化」として発表させていただきました演題が、学術発表奨励賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。

近年、口腔衛生状態の改善が誤嚥性肺炎の予防につながることに加えて、口腔清掃と嚥下訓練の併用により誤嚥性肺炎の発症頻度が減少したと報告されています。また、経管栄養管理に伴う唾液分泌量の低下によって微生物のコロニー形成が促進されるという報告から、栄養摂取方法の違いは微生物量をはじめとした口腔内環境にも影響を与えることが予測されます。

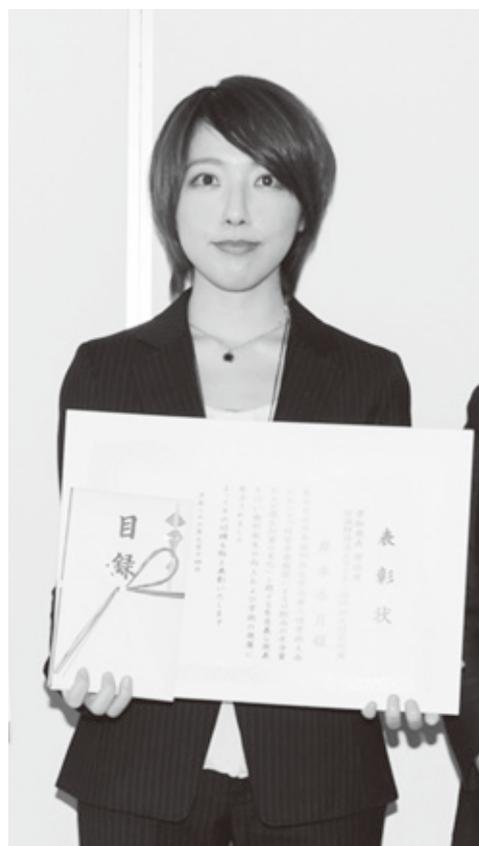
本研究では、口腔清掃と嚥下訓練に加えて、経口摂取が口腔内水分量と唾液および舌苔中の微生物量に与える影響を検討することを目的としました。

経口摂取再開前後で比較し、舌苔の付着状況および経口摂取・飲水時のむせが、食事再開に伴い有意に改善しました。また、食事再開後に、安静時唾液分泌量および頬粘膜の水分量は有意に増加しました。唾液および舌苔中の微生物量では、*Streptococcus*数は食事再開直後に一時的に有意に増加しましたが、退院の直前には減少しました。また、*Candida*数は食事再開前後で比較し、患者によってその増減にばらつきが認められ、追加調査により適切な義歯管理の必要性が示唆されました。摂食・嚥下リハビリテーションの介入により、対象者全員が経管栄養を離脱し、ムセなく3食経口摂取可能となりました。

本研究により、経管栄養からの離脱時における

歯科専門職による嚥下訓練などの介入は、経口摂取の維持・回復を図ることに加え、唾液分泌量をはじめとした口腔内環境の改善にもつながることが示唆されました。

最後に、今回の受賞は口腔生命福祉学講座の大内章嗣教授、ステガロユ・ロクサーナ准教授、柴田佐都子先生に加え、井上 誠教授をはじめ摂食嚥下リハビリテーション学分野の先生方、微生物感染症学分野の寺尾 豊教授、上松弘幸先生のご指導・ご協力の賜です。謹んで御礼を申し上げます。



組織再建口腔外科学分野・口腔再建外科

組織再建口腔外科学分野教授 小林 正 治

1. はじめに

新潟大学大学院組織再建口腔外科学分野は、初代教授でありました常葉信雄先生のもとで1967年6月に新潟大学歯学部口腔外科学教室として開設されました。その後、第一口腔外科学教室と名称を変え、2001年には大学組織の改編に伴い顎顔面再建学講座組織再建口腔外科学分野となりました。私は、1983年に新潟大学歯学部を卒業後、当時の第一口腔外科学教室に入局し、中島民雄教授（現名誉教授）、齊藤力教授（現名誉教授）の下でご指導いただき、2013年4月より当分野を担当しております。

2015年3月現在のスタッフ（関連部局も含む）は、教授1名、准教授2名、講師1名、助教5名、特任助教2名、医員3名、大学院7名（社会人大学院生3名を含む）です。また、5名が関連病院に長期出張という形で出向しております。当分野では、口腔外科学に関する先進的な研究を推進するとともに、将来を担う優秀な医療人の育成を図り、地域住民や医師・歯科医師から求められる質の高い医療を提供したいと考えております。本稿では、現在取り組んでいる研究の概要ならびに臨床の現状と特色について述べさせていただきます。

2. 研究の概要

口腔外科学では腫瘍をはじめ、発育異常（顎変形症）、先天異常（口唇口蓋裂）、外傷、睡眠呼吸障害など顎顔面領域の多様な疾患が治療の対象となるため、当分野の研究テーマも「組織工学的に作製したヒト培養骨・培養粘膜」「骨延長法ならびに骨移植術」「歯の移植」「顎変形症の診断と治療」「頭頸部癌の診断と治療」「睡眠呼吸障害の診

断と治療」「口腔顎顔面インプラントによる顎口腔機能再建」など基礎から臨床まで多岐に渡っています。特に、21世紀の生命科学では再生医療が大きなテーマとなっており、生命科学の



一分野を担う者として再生医療について積極的に研究・臨床応用を行っていきたいと考えております。組織再建口腔外科学分野では、これまでに培養複合口腔粘膜、培養骨、間葉系幹細胞を応用した骨再生、歯の凍結保存と移植、骨延長法における骨形成促進、移植骨の定量的評価法の開発など再生医療にかかわる多くの研究を進めてきました。このような再生医療は今後の歯科医療そのものを抜本的に変えることができるものと考えます。再生医療が実際に広く臨床応用されるまでには様々な問題をクリアしなければなりません。再生医療が持つ有用性、応用範囲の広さ、さらには免疫学的な安全性を考え、さらなる発展が望まれていることから、今後もこの分野での研究の発展を図っていきたいと考えております。一方、頭頸部癌や顎変形症、睡眠呼吸障害、顎口腔機能再建などの臨床的な研究テーマでは、その成果が治療成績の向上に直結するものであり、先端医療の研究開発は質の高い医療の提供に繋がることから、今後も積極的に進めていきたいと考えております。

3. 臨床の概要

新潟大学医歯学総合病院は、特定機能病院として地域の中核的医療及び高度医療を担う医療機関であります。したがって、当分野の診療部門である口腔再建外科としても地域住民や医師・歯

科医師から求められる高度な医療を提供したいと考えております。

当科初診患者の紹介比率は91%に達し、地域の2次・3次医療機関としての機能を果たしています。当科ではさまざまな口腔外科疾患を扱っていますが、その特徴として入院患者の半数を顎変形症症例（36%）と悪性腫瘍症例（14%）で占めています。さらに、特殊外来として、「口腔腫瘍外来」「いびき外来」「歯の移植外来」「顎堤形成外来」「培養粘膜移植外来」を開設しております。「いびき外来」は、1999年より院内外の呼吸器内科や耳鼻咽喉科と連携しながら、睡眠呼吸障害の治療を行っております。「歯の移植外来」では、1994年より2012年までに851本と多数の歯の移植を施行し、予後に関わる因子を解析するとともに治療成績のさらなる向上を図っています。「顎堤形成外来」では、機能的かつ審美的なインプラント補綴を行うために、インプラント前外科処置として様々な技術を駆使して骨や軟組織の増生を図っています。「培養粘膜移植外来」では、本院倫理委員会の承認を得て培養複合口腔粘膜の臨床応用を行っております。今後も、地域の医療水準の高揚と医療福祉の増進のために、常に新たな治療法や手術術式の導入を図るとともに、自治体や歯科医師会などと連携しながら新たな事業を立案・実行していきたいと考えております。

4. 人材育成の概要

近年の急速な社会構造の変革により、歯科医師には高度の歯科医療に関する知識と技術に加え、豊かな人間性や高い倫理観が求められています。また、大学院の教育改革においても、独創的な研究を遂行する能力のある研究者や高度医療専門職業人の育成が求められています。「鉄は熱いうちに打て」といわれますが、当分野では優れた口腔外科医を育てるために、臨床の技術と心、そして臨床に根ざしたアカデミックな好奇心を鍛えることを目的としたプログラムを構築しております。また、経験に合わせた目標を設定し、3年目に（公社）日本口腔外科学会認定「口腔外科認定医」、7年目に「口腔外科専門医」の取得を目指してもらいます。この（公社）日本口腔外科学会認定「口腔外科専門医」は、2003年11月に厚生労働省から歯科関係の学会として最初に広告が認可されたものです。是非、向上心と情熱を持った若い先生方に当分野に加わっていただき、一緒に仕事をできればと考えております。

最後になりましたが、このような誌面において当分野を紹介させていただく機会を頂戴したことに感謝するとともに、今後とも新潟大学大学院組織再建口腔外科学分野（<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/surgery1/surgery1.html>）をよろしくお願い致します。



歯科薬理学分野紹介

歯科薬理学分野 助教 柿原 嘉人

歯科薬理学分野 教授 佐伯 万騎男

1 はじめに

歯科薬理学分野は平成26年2月からスタートした新しい研究室です。スタッフは佐伯万騎男教授、川瀬知之准教授と助教の柿原嘉人の3名です。大学院生は、臨床の分野から小林美登と神谷真菜、さらに昨年の10月から、新しく“乳歯”として中田樹里が加わりました。まだまだ少人数ではありますが、学部学生の積極的な参加も受け入れており、現在、数名の学生が授業の合間に実験に参加しており、研究室は活気に満ち溢れ“つつ”あります。このような新体制でスタートした研究室の詳細については、ホームページに載せてありますので、是非ご覧ください（アクセス数急増中!?の佐伯教授のブログあり）。【ホームページURL】<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/pharmacology/pharmacology.html>

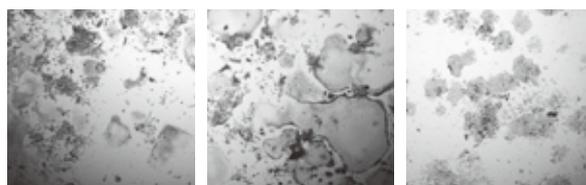


佐伯万騎男教授 川瀬知之准教授 柿原嘉人助教

2 研究・教育活動について

本分野では、多岐にわたる幅広い研究が行われています。まず、佐伯教授が主宰する『骨疾患や口腔がん治療を目的とした分子機構の解明と薬剤開発』、そして川瀬准教授による『細胞とバイオマテリアルによる歯槽骨と唾液腺の再生研究』が行われています。誌面の都合上、今回は、前者の薬剤開発の研究を紹介させて頂きたいと思いません。

まず、『骨』に関する研究についてですが、歯は歯槽骨と呼ばれる骨の土台の上で成り立っているため、歯科において『骨』の研究はとても重要で意義があります。歯周病などで歯を失ってしまうと歯槽骨が吸収されて薄くなり、その後のインプラント治療が難しくなることもありますし、また、骨粗鬆症などの骨疾患により骨密度が低下してしまうと、当然のことながら、歯周組織の骨も影響を受け、歯周病悪化の要因の一つとなってしまいます。骨は、常に、破壊と形成を繰り返し、生まれ変わっている臓器とも言われています。一見ムダなことをしているようですが、これによって私たちの骨のしなやかさと強さが保たれています。すでにあるものを壊さなければ新しいものは生まれません。絶えず生まれ変わろうとする。なかなか“骨”のあるヤツです。骨を壊す細胞は、破骨細胞、骨を作る細胞は骨芽細胞と呼ばれており、私たちは、破骨細胞に着目して、破骨前駆細胞が破骨細胞へ分化する過程を促進または抑制する薬の探索を行っています。骨粗鬆症などの骨吸収が骨形成に比べて亢進した疾患には、破骨細胞による骨吸収を抑制する薬が必要になりますし、一方で、大理石骨病のような破骨細胞による骨吸収が低下した疾患に対しては、破骨細胞を活性化

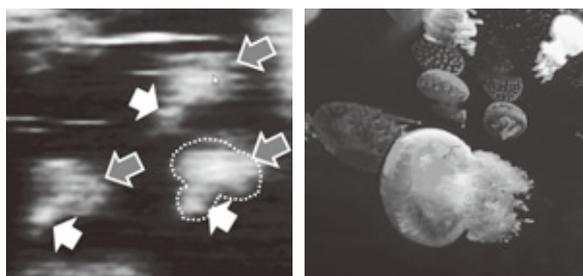


破骨細胞分化に影響を与える薬剤のスクリーニング（赤く大きな細胞が破骨細胞）
薬剤なし（左）、分化を促進する薬剤（中）、分化を抑制する薬剤（右）

する薬が有効だと考えられます。また、薬剤スクリーニングをはじめたばかりですが、大学院生の中田さんの“骨身を削った”努力の甲斐あって、すでに破骨細胞分化に影響を与える低分子化合物がいくつか採れてきています。この調子で、これからも、“コツコツ”がんばります。

もうひとつの薬剤開発のプロジェクトは、『口腔がん』を対象としています。日本では、口腔がんはがん全体の約2%にすぎませんが、生命に関わる重大な疾患であることに違いはありません。口腔がんの中で最も多いのは、扁平上皮がん（全体の約90%）で、私たちは、この口腔扁平上皮がんの治療薬開発を目指して研究を行っています。その治療薬の標的分子として、私たちはR2TPというタンパク質の複合体をターゲットにしています。この複合体は、Rvb1-Rvb2-Tah1-Pih1という4つの異なるタンパク質から成り、パンやお酒の発酵に使われる酵母で初めて発見されたのですが、その後の研究によって、私たちヒトにも同様の遺伝子が存在することがわかりました。

このR2TPを最新の高速原子間力顕微鏡で観察すると、なんと！クラゲのような姿をしています。酵母をモデル生物として使った研究から、私たちは、このクラゲのようなR2TPが栄養豊富なときには細胞質から核へ移行し、細胞増殖を活性化していることをみつけました。がん細胞は、とても勢いよく増殖する細胞です。では、このR2TPは、がん細胞ではどのような挙動をしている

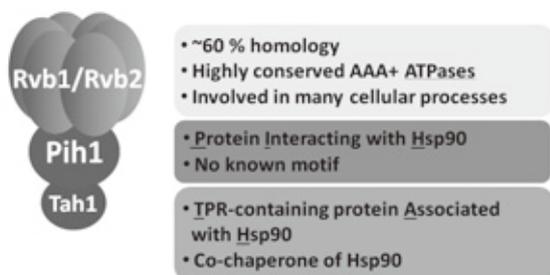


R2TPの高速原子間力顕微鏡像（左）とマリンピア日本海のクラゲたち（右）

るのでしょうか？私たちの最近のデータから、口腔扁平上皮がん組織でR2TPの発現が顕著に亢進していることが分かってきました。このことは、酵母とヒトでR2TPの機能も保存されているということを示唆しており、これまで私たちが蓄積してきた酵母の研究データがヒトのがん研究に役立つことが期待されます。今後は、さらにR2TPが口腔扁平上皮がんではどのような振る舞いしているのかを明らかにし、このクラゲ分子を“骨抜き”にする薬剤を探索していく予定です（おっと、クラゲに骨はありませんでした…）。

3 おわりに

以上のような研究テーマを遂行していくには、実験を手伝ってくれる大学院生や学部生が必要です。また、小さなラボが良い研究をするには、他分野との連携はもちろんのこと、他大学や国際的な共同研究も必要です。私たちは、すでに積極的に共同研究を進めており、様々な分野の方々から新しい技術や知識を教えて頂いたり、海外の研究室とも最新データのやり取りを行い、ディスカッションしながら研究を進めています。当研究室は、研究に興味あるすべての方たちにオープンなラボなので、もっと詳しい話を聞きたい方はお気軽に訪ねてください。私たちと一緒に研究してみませんか？



R2TP複合体

歯科衛生士部門より

歯科衛生士 村上 ゆみ

はじめまして。診療支援部 歯科衛生士部門の村上ゆみです。

私が新潟大学医歯学総合病院に勤務する前は、一般診療の開業医と学生実習の頃から憧れていた矯正科の先生の下で勤務してきました。余談ですが、衛生士ではなく他の職種にも付きたいと思い旧市民病院の心臓外科、小児科のクラーク業務していたことがあります。

開業医では、歯科医師と歯科衛生士だけの限られた小さな環境の中で働いていました。勤務して実感した事は多種職の医療スタッフとの連携した診療が可能であるという事でした。旧外来棟では、補綴科・口腔外科・予防歯科と配属されました。窓からはきれいな桜が見え診療しながらもお花見ができました。各診療科での勤務では診療介助だけではなく、看護師と共に各診療科における運営、在庫管理など、診療以外も学べました。

現在は新外来棟になり、ブロック5（口腔外科・画像診断・加齢歯科）に配属されています。窓がなく循環が悪いのか何故か暑いのです。



ベトナム旅行にて

旧外来では自分以外のケアをあまり目にする機会がなかったので、先輩衛生士のケアを勉強させてもらい、これまで自分が専門で行ってきた口腔ケアが単に歯科領域にとどまらない意義のあることを改めて実感しています。口腔ケアは術前、術後の二次感染を軽減できるとされており、口腔が全身の一部であることを日々の診療より感じます。口腔ケアを行った患者さんが心身共に改善している姿をみて大きな喜びを感じるとともに、さらなる技術の向上を目指さなければ、という励みにもなります。

私が勤務して十数年が経ちましたが、その間に素敵な出会い、尊敬でき信頼のおける友人ができました。まさかこの歳になりそんな素敵な友人が出来るのかとびっくりです。

未滿時保育だった2人の子供も、娘は今年専門学生となり2人で卒業旅行で初の海外に行き、香港空港ラウンジで一泊してしまうというハプニングにあたり、息子は一緒にコンサートに行っても他人のふりをする反抗期な中学3年生と成長しました。

最後に、日々ご指導して頂いている先生方にこの場をお借りして御礼申し上げます。

今後共にご指導いただきますようどうぞよろしくお願いいたします。



2015年看護師・歯科衛生士懇親会にて

言語治療室より

医歯学総合病院・言語治療室・特任助教 大 湊 麗

良い季節になると、歯学部〇年生のとても可愛い女の子から、高校の同窓会を是非一緒に、大変嬉しいお誘いを頂くことがあります。普段、閉鎖的な環境にいますと気付かないのですが、そのような機会の日頃関わることのできない先生方とお話させていただくと、言語治療室はどこにあるのか、どのような患者さんを診ているのかといった基本的なご質問をいただくことが予想以上に多いものです。患者さんを通して関わりの深い、口腔外科、矯正歯科、小児歯科、予防歯科などの先生方はよくご存知と安心しておりますが、その他の先生方にはあまり馴染みのないところと再認識した記憶があり、今回はこの場をお借りして少しご紹介させていただけたらと思います。

まず私がしていることは言語治療室の名称通りで、言語を治すことを目的としています。言語を治すといいますと大人になってからでは難しいことが多いですので、幼児期のお子さんを中心です。最も身近なところでは、もうすぐ学校に入るのに赤ちゃん語が残ったままで正しい発音ができないといったような状態でしょうか。これは幼児期には誰もが経験する可能性があるものですが、お母さんは大変心配されて病院に連れて来られるわけです。この場合の多くは、構音発達過程における晩期獲得音の早期獲得音への置換といった単純なもので、適切な言語治療があれば早期に治してあげることができます。また、子どもの言語発達に関連して、言葉が詰まって滑らかに出てこなかったり、発達のスピードがやや遅かったりする場合など、歯科だけでなく本学の小児言語発達領域に広く関わらせていただいています。

この他に、お口の中に先天的な異常があって治療が必要なお子さんがおり、言語治療室が最も力を入れて取り組んでいることは口唇口蓋裂の言語治療です。口唇口蓋裂のお子さんの言語には鼻咽腔閉鎖機能が大変重要ですが、この鼻咽腔閉鎖機能が未熟であったり、うまく発達してくれなかつ

たりすると、上記の幼児音残存といったような単純な言語症状に留まることは少なく、口蓋裂言語と呼ばれる特異な言語症状を示します。このような心配に対し、早期からの正常な言語発達の促進、言語障害の予防を目的として、お子さんが1歳を過ぎた頃から言語治療室にも来ていただいています。適切な時期に手術を行い、成長に伴う言語発達に向けて早くから取り組むことで、できるだけ言語の問題を少なくすることが可能となっています。しかし、最大限の努力下であってもやむを得ず4歳頃を過ぎても残存するお子さんがおり、この場合には本格的に言語治療を行うこととなり、構音時の正常な鼻咽腔閉鎖機能の獲得を目的として、特異な構音操作による音の誤りを一つずつ修正していきます。言語治療はお子さんにとっては言語の学習であり、この学習がうまく進まないとなれば更なる心配を生むこととなりますが、それはまた、この分野にご興味がおありでしたら。

ほとんどのお子さんにおいては、就学前には明瞭な言語を獲得し、活発にお話ができるお子さんに育てられています。いずれにしても言語を治すということは一見簡単そうに思われますが、どうやって治すに至るかは、一応それなりの専門的なテクニックが必要になり、それが言語治療室の特色だと思います。

最後に、言語治療室の場所は外来棟5階にあります。5階のフロアには外来手術室などがありますので普段は静かですが、言語治療室の元気な患者さんがいらっしやると大変賑やかになり、クラークさんをはじめ皆さまにご迷惑をおかけしています。いつも本当に申し訳ありません、今後ともよろしく願いいたします。そのやや緊張した雰囲気の外来手術室の反対側の通路に、お子さんの心を惹きつけるための楽しい小部屋がありまして、そこが言語治療室です。言語にご興味がおありの方、是非遊びにいらしてください。

素 顔 拝 見



顎顔面口腔外科

勝 見 祐 二

H26年8月より顎顔面口腔外科の助教を拝命致しました勝見祐二と申します。歯学部ニュースは今まで縁がなくこのような原稿を書くのは今回初めてですので、自己紹介として前半は経歴に関して、後半は趣味に関して書かせていただきます。

出身は新潟市西区で、高校卒業後1年浪人を経て岩手医科大学歯学部へ入学。大学卒業後に本学2年コースの臨床研修医として顎顔面口腔外科（以下顎外科）に入局しました。1年目の診療の主体は総合診療部で、当時の研修医はまだ15人程度と少なかったのですが、現新潟労災病院の高山先生をはじめ個性的な同期に恵まれて非常に楽しかった思い出があります（学内で残っている先生は冠ブリの川崎先生だけになってしまいました）。研修医2年目からは口腔外科と麻酔科のラウンドを行い、高木教授をはじめ医局員の先生方から口腔外科の基礎を学び、3年目以降は長期出張として関連病院である会津中央病院、佐渡市両津病院、新潟労災病院、新潟中央病院へと出向させていただく機会を得ました。病院勤務を通し外科診療だけでなく一般歯科診療を学ぶと共に、インプラント治療、入院や老健施設の患者さんを対象とした口腔ケアおよび有病者歯科治療などの経験ができたのが現在の自分の臨床のベースとなっております。6年目に社会人大学院に入学し、硬組織形態学分野の大島教授にご指導いただき肉眼解剖を用いた口底部血管走行に関する研究を開始。大学に戻った7年目、8年目はインプラント治療部に診療の主体を置き、9年目以降に再び顎外科へ戻っております。昨年度に当初の目標であった口腔外

科専門医を取得し、H27年1月現在で卒後11年目になります。私の歯科医師キャリアの約半数は口腔外科以外の一般歯科診療が占めており、これらの経験もあって自分の目標とする口腔外科診療とは、疾病に対する治療だけではなく、最終的には機能回復を図ることであると考えております。インプラント治療は外科から補綴まで一連した治療（トップダウントリートメント）を行うための重要な手段と考えており、今後も勉強していきたいと思っております。もちろん口腔外科医としてのスキルアップを目指し、口腔外科指導医をめざし努力していく次第です。

自分の趣味はスポーツ全般で、大学時代は硬式テニス部に所属し、春は東北学生リーグや北医体、夏は全歯体と比較的真面目に取り組んでいました。新潟に戻ってからは、本学主催のサッカー大会やサッカー部OB戦にも参加させていただく機会をいただき、インプラント治療部星名先生に代わりこの場を借りて関係する先生方へ感謝を述べたいと思います。冬は学生時代からスノーボードを行い、パークと呼ばれるジャンプ台などを滑るのが好きだったのですが、職業柄手の怪我のリスクを考慮し、5、6年前よりフリースタイルスキーに転向しました。休日に時間あればヘルメットとプロテクターを装着し、独りでスキー場に向かい、恐怖心と好奇心と格闘しております。スキーの方が空中のリカバリーが可能で安全に飛べるため、もし皆さんの中で比較的無茶したいスノーボーダーやマンネリ化しているスキーヤーがいましたら、一度フリースタイルスキーにチャレンジしてみてください。

最後になりますが、若輩者ではありますが、今後も臨床、研究、教育に関し向上心を持ち、新潟大学歯学部の発展に貢献できるよう努力していきたいと思っておりますので、どうぞ宜しくお願い致します。



生体歯科補綴学分野
助教

Marcelo Rosales

Hi my name is Marcelo Rosales and I'm currently a member of the Bio-prostodontics department at Niigata University.

As some of you already know, I come from Bolivia (in South America) and my hometown is La Paz, although I was born in Magdalena a very small town near to the border with Brazil. I did my elementary and high school years in La Paz, but when I was 16 years old I participated in an exchange student program to Columbus, Ohio, United States. After returning back to Bolivia I immediately started the Dental School in La Paz.

After graduation I participated in several research projects with some professors and I had the opportunity to attend one of the IADR conferences. After attending the conference, my interest in research grew stronger and decided to look for a Post graduation program abroad. This led me to participate in a short course program in the University of St. Radboud in Nijmegen, Netherlands. Soon after finishing this short course I applied for a scholarship, back in Bolivia, at the Japanese embassy. I was awarded with the Monbukagakusho scholarship and accepted by the department of Prostodontics at Niigata University.

Coming to Japan was a very big change for me; food, culture, and language was very different from other places I was before, so adapting was a little bit difficult at

the beginning and it took me some time. Luckily, as an international student I had the chance to learn Japanese for six months at the International House of Niigata University at Ikarashi campus. This gave me a chance to get familiar with the Japanese culture and customs.

Once finished the Japanese course, I moved to the Asahimachi campus and started my studies at the Niigata University Dental and Medical Hospital department of Prostodontics.

At first I was involved in a project under the supervision of Dr. Stegaroiu Roxana, and Professor Dr. Uoshima Katsumi concerning the influence of loading test type on the results of failure resistance investigations of teeth restored with post and cores; where two experimental set-ups were used to compare the failure resistance and failure mode of teeth restored with glass fiber posts and resin core with those of teeth restored with cast post and core. After finishing and publishing results of this research I continued my studies under the supervision of Dr. Kaku Masaru and Prof. Dr. Ushima on Osteoblastic differentiation and mineralization ability of periosteum-derived cells compared with bone marrow and calvaria-derived cell. This project was challenging but it was also very interesting for me. I learned so many things during this period of time thanks to the help of all the staff members of my department.

After graduation I became research assistant and now I am assistant professor of the bio-prostodontics department. Currently I am also involved in teaching as assistant in the practical training as well.

The head of the bio-Prosthodontics department is Prof. Dr. Uoshima Katsumi, Associate Prof. is Dr. Kaku Masaru, and other members of the department include, Dr. Akiba Yousuke, Dr. Kawasaki Maiko, Dr. Aoyagi Yujin, Dr. Akiba Nami, Dr. Kaku Sakiko, and Dr. Nagasawa Masako. Our department mainly focuses in (but is not limited to) the research of bone formation and turnover for its possible clinical application in dental implants. Current Research studies include the effect of collagen Crosslink on Osteoblast proliferation differentiation and Mineralization, localization of type XII collagen and its interacting molecules in PDL at normal and hyper-occlusal conditions, effect of mechanical loading on post-translational modifications of collagen, Royal Jelly as contributor of the improvement in Bone Quality by the regulation of post-translational modification of collagen, gene expression of HSP27 during the course of Osteoblast differentiation and mineralization as well as the early behavior of transplanted cell and the effect of HSP27 on osteoblast survival, the distribution and partial characterization of neural crest derived cells in adult periodontal ligament, degenerative changes of the bone surrounding dental implant upon excessive occlusal load, excessive occlusal loading recruitment of CD 4-T cells in periodontal ligament as well as the histological research of bone tissue surrounding occluded implants in ovariectomized rats.

Other projects include the use of deacetylase inhibitor treated cells to study its contribution to bone augmentation, relationship between stress distribution and bone morphology using a rat implant occlusal model by means of 3 d

modeling and Finite Element Analysis. As described above, our department is very active in research and is actively involve in the clinical practice.

Although I just started as a staff member I am very happy and honored to be able to work in the bio-prosthodontics department, our team is very friendly and there is a lot of support from the supervisors. I encourage everybody to visit us at our lab if you have questions or need advice of any kind.



歯学教育研究開発学分野
(歯科総合診療部) 助教

塩 見 晶

こんにちは。歯学教育研究開発学分野（歯科総合診療部）の塩見晶（しおみ あき）です。

素顔拝見の原稿依頼をいただきましたので、恥ずかしながら簡単に自己紹介をしたいと思います。

素顔拝見ということですので、自分の思う自分の性格や趣味について考えてみました。獅子座のO型、2人兄妹の末っ子で、周りの人からはたいてい血液型を当てられますし「お兄ちゃんいそだね」と言われることが多いため、多くの人が抱くO型と兄のいる妹像に近い性格をしているのだと思います。目つきが悪いからかとおつきにくそうと思われがち(?)ですが、マイペースな甘ちゃんです。雪国育ちなので粘り強い性格も持ち合わせているはずだと思っています。

生まれも育ちも新潟県長岡市で、通っていた小学校は全校生徒140人クラスメイト16人という田んぼと森に囲まれた田舎町で育ちました。クラスの人数が少ないので、教室に机を並べると前から3番目が最後列になり、教室の後ろでキャッチボールもできてしまいます。男子だけではチームが成立しないので、昼休みは女子も駆り出されて全員でサッカーや野球をしました（1チーム8人でもまだ足りないですが…）。自由な校風で、私

たち児童が動物を飼いたいと提案すると、ヤギとウサギ、チャボの飼育をさせてくれました。学校に登校すると毎朝グラウンド裏の山道をマラソンするという朝マラソンがあったのですが、ヤギと一緒に朝マラソンをしたことは当時の先生方をたいへん驚かせたそうです。学活の時間では、クリスマス会を企画して自分たちで作った劇を披露したり歌を歌ったりと班ごとに出し物をしたり、収穫したサツマイモを売り歩き、集まったお金からクラスでインコを飼ったりと、だいたいがやりたいようにさせてもらったなあと感じます。冬になると当時は1メートル2メートルの積雪は当たり前でしたので、体育の授業や放課後の部活動ではクロスカントリースキーがありました。自分の息遣いとスキーの音しか聞こえない中で真っ白な雪の上を黙々と滑っていると、なんとも表現しがたい、透明な気持ちになりました。このような環境で育ったことで、ちょっと空気の読めない世間知らずな人間になってしまいました。

その後も中学・高校・浪人と長岡市で過ごし、もともとちまちまと小物を作ることが好きだったことと、娘が安定した生活を送ることを望んだ父から「歯医者か薬剤師がいいぞ」とそそのかされたことが志望動機になり、新潟大学歯学部に入學しました。歯学部を卒業した後は歯科総合診療部で1年間卒後臨床研修を行い、入れ歯が得意になれるといいなあと思い包括歯科補綴学分野（旧1補綴）の大学院に進み、大学院終了後の平成26年

4月から歯学教育研究開発学分野にお世話になっています。まだまだ未熟で、相談に来た研修医さんと一緒に悩むこともしばしばですが、少しでもお役に立てるようがんばります。

休日はたいていボーっとして過ごし、気分転換にカフェに出かけます。美術館が好きで、万代島美術館や新潟市美術館、長岡にある近代美術館によく行きます。出先でも時間があれば美術館に行きます。最近では、夏には友人の結婚式で長野に行った際に美ヶ原高原美術館に行き、秋には大阪大学で学会があった際に太陽の塔を見に万博公園を散策しました。行ったことがある方はお気づきかと思いますが、とりわけ屋外に展示されている大きなものが大好きです。自然の中にカラフルで巨大な人工物があるという意外性が面白いと思います。自然とアートの融合といえば、十日町で3年に1度開催される大地の芸術祭アートトリエンナーレですね！今年はちょうど開催年に当たりますので、みなさまぜひ足をお運びください。



My journey in Japan

Division of Removable
Prosthodontics

Simonne Estacio Salazar



I was born and raised in a tropical country, the Philippines. It is composed of 7,107 islands surrounded by a vast body of water. The Philippines is tagged as calamity ridden country where typhoons come and go, and earthquake usually occurs. Though behind all these, are richness in natural resources; stretches of fine beaches, lush forestation; deep rooted family ties and a passion for their faith. The people while known to the world for their music and fun loving ways with happy smiles despite adversities are called Filipinos. I am strengthened in character by difficulties in life and yearning for higher education to be shared with my countrymen.



Picture of one the beach in the Philippines called Boracay Island

My life in Niigata

I first set foot in Niigata, Japan on the

25th of September 2014. The air was chilly and I was tired from my trip, when I suddenly saw the warmest smiles there could ever be of Dr. Kobayashi and his wife that night. It was their wonderful smiles that vanished my worries and gave way for my happiness and security. Cold breeze blew and a picturesque view of Niigata city with its glaring lights greeted me as we headed to my apartment. A shivering cold and loneliness enveloped me as I entered my room, it was the first time I was away from my family. It suddenly dawned on me that I was to start a new life, alone but armed with the strength in chasing my dream to full realization- and for this, I will forever be grateful to the Japanese Government Monbukagakusho: MEXT Scholarship Program.

I was overjoyed by the warm welcome of everyone in my department, Division of Removable Prosthodontics, Niigata University. On my first day, they prepared a welcome party filled with sumptuous food and drinks



Beautiful Sunset in Niigata-shi

and good stories to share, I felt like family. They were kind, accommodating, and very helpful, I was mesmerized! In the days to come, Niigata University has opened me to a one of a kind learning experience where great minds share ideas and knowledge. An institution that will help me learn new techniques and advancements in the field of Dentistry.

It was in Niigata University that I found my home away from home. Every person that I have encountered has been gracious, gentle and kind. I found my Place, my Peace and my Comfort in the institution. Warm smiles, cheerful greetings and kind hearts from my professors, teachers and friends helped me thru in starting my life again.

I have heard that Japan celebrate many festivities the whole year round. Each festival has a character of its own. The Shin-dai-sei Festival of Niigata University last

October 2014 was my first. The program ran all throughout the day with different activities to do and presentations to watch. It was vibrant, fun and colorful to see and experience. Everyone who joined was in their festive mood ready to join the fun be it dancing or singing. We even got to try eating a variety of authentic Japanese food that were cooked by the students. It was indeed a wonderful day for us.

I joined the Discover Niigata tour in No-

vember, an experience I will never forget. The tour depicts the rich history and culture of Niigata, a “must” for everyone to see visiting the city. The first destination was the Niitsu Railway Museum. The exhibits, displays and illustrations were vast and interesting. Collections of vintage uniforms, telephones, pocket watches etc. of previous employees were amazing. The illustrations of train structures, the mechanism of transportation in the olden times and how it evolved until today leaves me

in awe. Everything has its own stories to tell. “The Falling Leaves” is a song my grandmother loved to play over and over again. It was in Niigata Botanical Garden where I had my first experience of “the falling leaves” . It was Autumn a colorful and beautiful scenery that one cannot fathom. As the warm sunshine touches my face and the magical beauty of the garden greeted me, I remembered my

grandmother. The beauty and color of Japan is a site to behold – hence I feel blessed and honored to see all of these. Next stop was the Niitsu Art Museum, an edifice housing different masterpieces and artworks of known people, It gave us a glimpse of the rich art history of Japan considered as one of the best in the world. Last point was the Aeon Mall, I enjoyed browsing through shops and indulging myself with the delightful sweets and foods on display. Every presentation is a work of



Colorful and scenic view at the Botanical Garden

art. I must admit that I was so thrilled with the food presentation that I could not afford to eat so that I cannot destroy the work of art. It was a nice place to end a very interesting tour.

My enthusiasm was on high when I joined my second tour, the Autumn Niigata City Tour. With the previous tours that I had, I was totally mesmerized and enthralled! The tour was hands on and perfect in satisfying my five senses. We headed for the rice factory, we were al-

lowed to choose the flavor and cook our own rice cracker and to top it all- eat it too! The aroma and richness of flavor of the rice cracker satisfied my sense of smell and taste immensely. It was an experience of a lifetime! Niigata City Aquarium was next on our list. It was an extraordinary experience to see the different animals that inhabits Japan Sea. Interesting colors in different

shapes and sizes were present that could make you love the place even more. We were very fortunate to be given the opportunity to see the dolphin show, we saw them do tricks and play. The cheers, laugh and applause of everyone present even made the experience more enjoyable. The last stop of the trip is a very memorable one; it was in Yahiko Shrine, where we got in touch of nature. I was very grateful to have felt and touch the beauty of the surroundings, see the culture and experience

the tradition.

In my months of stay, I have seen remarkable places, joined festivals, toured a rice cake factory- a many firsts in my life. I am totally impressed, ecstatic and enthralled. Many thanks to the Niigata University and its International office for organizing trips that most International students will have the opportunity to learn, enjoy and appreciate. I am lucky enough to have joined a festival two autumn trips that were organized and I am happy to say

that it was a very wonderful experience for me.

The places I have been to, taught me a lot of what really Niigata is. To truly know the place and its people, one must immerse himself to the cultures and traditions of the place that will open your eyes to what real beauty and kindness is. And by far, I have loved this city as much as I love my own. I am very thankful for this

very wonderful opportunity that is given to me.

As Lucile once quoted "If you never chase your dream, you will never catch them." I am very honored and thankful to the Japanese Government Monbukagakusho: MEXT Scholarship Program, and to our Chief Professor Dr. Takahiro Ono, to our Associate Professor Dr. Hiroshi Kobayashi everyone in my department for guiding me and giving me the chance to chase my dream.



Beautiful sunset at the seaside of Niigata

新潟大学歯学部国際交流サークル “NEXUS”

歯学科5年 目 黒 史 也

私たち新潟大学歯学部国際交流サークル、通称NEXUS（ネクサス）は、2011年より続く新潟大学歯学部独自の短期交換留学プログラム、ショートステイ・ショートビジットプログラム（以下SSSVプログラム）の参加経験者をメンバーの中心とする、部活動です。

私たちの主な活動は大きく分けて3つあります。

1つ目は交換留学生との交流です。SSSVプログラムの一環として、今まで東南アジアを中心とする各国の歯学部から、留学生を受け入れてきました。殆どは約2週間の滞在となりますが、その間の週末や放課後を利用して留学生たちと晩御飯を食べに行ったり、温泉に日帰りの旅行に行ったり、歓迎会、送別会を開くなどして、留学生と親睦を深めます。多くの留学生が日本に来るのは初めてで、私たちが普段気にしないような文化や慣習に驚く姿を見て、日本の文化を再確認することもしばしばです。もちろん彼らとのコミュニケーション手段は英語なので、慣れないながら必死に伝えようと努力しています。そうして彼らと過ごした日々は私たちにとっても、大変思い出深い貴重な経験です。

2つ目は英語でのプレゼンテーション練習です。SSSVプログラムの参加者は参加後もれなくSSSV報告会にて英語でのプレゼンテーションを行ってまいります。会話とはまた違う難しさに皆一様に戸惑いながらも、何とか発表をやり遂げています。またSSSVとは関係なく不定期にNEXUSメンバーのうちの代表者がテーマごとのプレゼンテーションを行うこともあります。いずれにしても、普段の学生生活の中ではなかなか経験できないことなので、難しさもありますが、充実した時間になっていると思います。

3つ目は米国歯科医師国家試験（NBDE）勉強会です。これは今年度から新たに始まった企画で、まだ回数は重ねられていませんが、米国の歯

科医師国家試験のうち、Part 1と呼ばれる基礎系の範囲を、月に1回10問程度で翻訳、解答、解説のプレゼンテーション作成まで行っています。歯科医学を英語で学ぶことの重要性は、SSSV参加者なら誰でも思い当たることですが、今まではそのモチベーションをうまく形にすることができていませんでした。今回この企画を始めることで今まで以上に活動が活発になり、また今後留学生を受け入れる際にも、日常会話に留まらず、歯科医学や歯科医療界の話題について意見を交換できる日が来れば、こんなに素晴らしいことはないと思います。

歯科医学、歯科医療という世界で生きていく上では、英語は確実に必要になるスキルの一つですが、普段の生活に追われ、なかなか英語と触れ合う時間を作ることは難しいかもしれません。しかし、NEXUSでは普段の生活の中に留学生とのひと時を組み込むことで自然に、かつ楽しく英語を学ぶことができていると感じます。また海外に同じ歯科医師を志す友達がいるというのも、とても心強いものです。

皆さんも、どうぞ気軽にNEXUSを訪れてみてください。



留学生のみなさんと交流。左が筆者。

新潟大学歯学部サッカー部とは??

サッカー部 歯学科3年 渡辺 昌 崇

はじめに

はじめまして、新潟大学歯学部サッカー部主将渡辺昌崇です。今回歯学部ニュースでサッカー部の紹介をさせていただき嬉しく思います。「そもそもサッカーとは？」今日はそこから書いていきたいと思います。サッカーとは、球形のボールを用いて1チーム11人の2チーム間で行われるスポーツ競技のひとつです。みなさんがサッカーの試合を観ていてオフサイドってなにって思ったことがあると思うので説明したいと思います。相手側ゴールラインより前に相手側の選手が2人（GK含む）の時に、相手選手達より前、あるいは間に味方が立ち、その味方にボールを蹴り出す行為。または、ボールに関与する動きをすること。または、相手選手を邪魔することをオフサイドといいます。他にも説明したいのですが、これぐらいにして……

部活の概要

私たち歯学部サッカー部は現在21名（マネージャー5名、兼部4名）で活動しております。計算してみてください、正規部員は12名しかいないのです。サッカーは11名で行うスポーツであるので、新潟大学歯学部サッカー部は深刻な人数不



グラウンセナ（新潟のサッカー施設）にて。
下段左から3番目が筆者。

足に日々悩ませられています。そのような悩みを吹っ飛ばすくらい練習は楽しいです。基本月・水・土の週3日練習をしています。練習場所は主に新潟大学附属小学校のグラウンドを使わせていただいています。練習メニューはコーチがいないので、チームメイトの意見を参考にしながら主将が考えます。練習中に声あまり出ていない時は辛いメニューにしたこともあります（笑）部活のレベルは初心者から小・中・高とやっていた人がいるので、初心者の方大歓迎です。

大会

歯学部サッカー部の大会は主に3つあります。一つ目は、毎年6月に行われる北日本医科学生サッカー大会（通称北医大）です。主に医学部のサッカー部が出場していて医学部のサッカー部は高校並に練習をしているので、いつもボコボコにされて帰ってきます。二つ目は、全日本歯科学生総合体育大会（通称オールデンタル）です。この大会で勝つために日々練習しています。私が大学に入ってから2回戦というものに縁がないので自分の代では勝ち進みたいと思います。三つ目は、Nリーグという全学のフットサル大会です。この大会はたまに少し苛立ちを覚える言葉を言われたりしますが、比較的レベルが合っていて楽しめる大会になっています。この3つ以外にも県リーグや日本歯科大学新潟生命歯学部のサッカー部と練習試合を行っています。

部活動以外

部活動以外では4月に花見、7月に伝統の浜コン冬にはスノーボードやスキーを楽しんでいるように新潟の四季を感じています。

最後に

このようにオールデンタルで勝利するために真面目に練習に取り組んでいるので、応援よろしくお願いたします。

ポリクリを終えて

ポリクリを終えて

歯学科5年 金井 梢



臨床実習に参加するために、さらにその後臨床で活躍して行くために、必要なものは何だろうか。歯学に関する知識だろうか、技術だろうか、責任感だろうか、自信だろうか。そのす

べてが必要であること、そしてそのほとんどを自分が十分には持っていないことを知るのが、この臨床予備実習、いわゆるポリクリであった。

ポリクリとは五年の前期、五月から始まる実習である。本学の臨床実習は「診療参加・実践型」で行われる。つまり、まだ歯科医師免許のない学生でありながら、実際に患者の治療に当たるのである。そのことの重大性は言わずとも伝わるであろう。そのため、臨床実習に参加するためには、共用試験（CBT、OSCE）に合格しなければならないと同時に、このポリクリをすべて無事に終えなければならないのである。

ポリクリでは歯科にあるすべての科をある程度（多くて7日間、少なくとも1日）の期間で回り、各科で出される課題を実習として行う。その内容は各科によって様々で、支台歯形成や外来にある器具・材料の使い方など実践的なものから、デンタル読影スケッチや治療計画など幅広く学ぶことができた。相互で実習を行い、初めてマネキンではなく生身の人間の口の中を触る経験をし、その時の緊張感は今でも忘れることができない。口腔外科で行われた伝達麻酔の相互実習では、手が震

え冷や汗をかき、クラスメイトに少し笑われたのもいい思い出である。

臨床実習の戦闘服であるライトグリーンの白衣、通称「緑衣」に袖を通すのもこのポリクリが初めてである。ついにここまで来たかと感動し、同時に言い表せない緊張感に包まれたのを覚えている。その緑衣を着て外来に出る責任感を味わったことによって、意識が変わった人も少なくないだろう。

始まる前は、「ポリクリ？何だそれ」といった状態であったが、ポリクリを終えて、今臨床実習を行っている、その大事さを実感する。ポリクリは、四年次までに学んだ歯学に関する知識や基礎実習と、五年の後期から始まる臨床実習とを繋ぐものである。今まで学んだことが、実際の臨床ではどう活用されているのか知り、それを自分が実行するには何が必要なのか考えることになる。それが先に書いた知識なり技術なりになるのである。個人的にはポリクリで各科を回るのと同時に、その科に関するところのCBT問題集を解くと、ポリクリの予習にもなり、知識も定着しやすいのでお勧めである。また、OSCEに役立つ内容もたくさんあるので、このポリクリをきちんとこなせば、共用試験は怖くはないのである。と言いつつ、共用試験の時は心臓の音がうるさいくらい緊張したが。

歯科学生として、在学中にここまで臨床の経験ができるのも新潟大学くらいであろう。その貴重な経験、臨床実習を実行できるのも、このポリクリというものがあるからだと思う。これからもこの緊張感と責任感を忘れず、臨床実習、そしてこれからの臨床で、努力していきたいと思う。

早期臨床実習を終えて

早期臨床実習を終えて

歯学部歯学科2年 内田 俊

小学生の頃、父が歯科用の口ウで大きな歯の模型を私に作ってくれたことがある。確かあれは私が母親の目を盗んで、何か遊べるものはないかと実家の歯科医院の技工室に忍び込んだ時のことである。「これは口の中のどの部分の歯だろう。」まだ乳歯も抜け切れていない私の心に疑問を残し、あれから随分と長い月日がたった。

そんな私も大学2年生になり、日々歯と寄り添う日々を送っている。実際に病院に出て行う早期臨床実習も終えた。「早期」という言葉は何かと未熟さがつきまとうイメージがある。その通りだ。この実習でやることはほとんど基本的で、退屈で、よく分からない。先生方の説明はまるで呪文だ。しかし、そのすべてが将来の土台になる。実習ではグループでローテーションしながら主に歯科の各診療科の治療を見学する。まだ歯については少しかじっているくらいの知識しかない我々でも、将来自分がやりたい診療科やイメージ像を想像するには十分なものであった。その診療科は、義歯補綴科、歯周病科、矯正歯科、歯科麻酔科、小児歯科などその他にもたくさんあり、多様な口腔内の異変に対処できるようになっている。その中でも私が一番記憶に残っている診療科、というより愕然として忘れられない診療科が「顎顔面口腔外科」である。他の科では実際の患者様の治療の様子を見学させていただくのだが、この科では症状が他に比べて稀であったり、患者様の精神的要素の考慮などで写真での解説が主であった。その中で先生が症状や治療例、また術後の解説をしてくれるのだが、ある患者様は嚢胞（膿が入った袋状のもの）が顎骨の中に生じ、顔の大き

さが2倍になるくらいパンパンに腫れていた。それを見ただけで茫然としたが、それだけではなく嚢胞が大きくなりすぎて呼吸困難の症状も出ていたと聞いて自分の呼吸も止まりそうになった。挙句の果てには嚢胞の圧力でその顎骨の一部が花火のように破裂してしまっているレントゲン写真で私はとどめを刺されてしまった。その患者様は無事嚢胞を摘出できたそうだが、執刀医の技術やそれをサポートする歯科医、看護師、そして現代の医療技術を目の当たりにしてとても感銘を受けるとともに、自分がその時着ていたダボダボの白衣の本当の意味を少し理解した瞬間であった。

もうすぐ3年生になる。順調にいけば約4年後には歯科医となる。患者様の健康に、命に常に寄り添わなければならない。もし歯科医としての基本姿勢を忘れそうになったら、この早期臨床実習での純粋な驚きや、あの時の大きな歯の模型を見て抱いた「歯」というものに対する奥深さ、初心などをしっかりと思い出したい。そして将来は今亡き父親のような立派な歯科医になり、あの日父親が見ていたであろう面影を、今度は私が十分に眺めたいと思う。大きな歯の模型を添えて。



筆者（中央）

早期臨床実習を終えて

口腔生命福祉学科2年 牧口由依



無事2年生に進級し、改修工事を終えて新しくなった講義室を横目に、私たちの学校生活はまだ古く狭い診療室の跡地で始まりました。そのような環境の中で不安を抱きながらも、今年

から始まった歯科や福祉の専門的な講義・実習に期待を持ちながら日々を過ごしていました。4月にもらったシラバスを見て、2年生の前期には早期臨床実習ⅡBがあることを知りました。1年生の前期の早期臨床実習ⅠAの応用編だと思っていましたが、内容が全く異なり施設見学や介護体験を行いました。実際に医療や福祉、保健の現場を訪れ、そこで働く歯科衛生士や社会福祉士はどのような仕事をしているのかを学ぶことができました。この実習では、新潟市児童相談所・ばんだい桜園・新潟市医療センター・新潟市保健所を見学させていただきました。当初の私のイメージでは、歯科衛生士は病院や診療所で活躍する職種であると思っていたので、実際に施設を見学して、自分は将来このような場所で働くことになるかもしれないと考えているとさまざまな関心や疑問が生まれました。

児童相談所は児童虐待の相談をする所であるというイメージを抱いていましたが、虐待だけでなく児童に関する障害や非行などの相談も受け付け、虐待予防の子育て支援としてさまざまなプログラムや講座を行っていることを知りました。ばんだい桜園は、私がこれまでに見たことのある老人ホームとは異なった印象を受けました。10名で

1つのユニットとして生活をするユニット型というスタイルを取り入れているため、もっと大きな集団で生活をする従来型と比べて管理がしやすく、ひとりひとりに目が届きやすいそうです。そして、都市型であり入居者の状態を確認するのに訪問しやすい立地であるため非常に面会者が多く、入居待機者が増えているのも事実です。このように現場を訪問することで、高齢化や虐待など最近よく耳にする社会問題が実際に身近で起きていることを実感でき、座学で得た知識だけでは分からないようなことを専門家から聞くことができました。

保健所では3歳児健診を見学させていただきました。ただ体や口腔内の状態を診るだけでなく、母親に問診している際も子供の様子を見ていたり、それぞれの生活や食習慣に合わせた保健指導を行っており、観察力や指導力が必要であると感じました。医療センターでは、実際に歯科衛生士の方からそこでの仕事について教えていただきました。外来患者を診るのが主な仕事であると思っていましたが、医療センターの入院患者の受け入れ、隣接する老人ホームへの訪問診療、栄養サポートチームや摂食・嚥下チームへの参加など、歯科衛生士の活躍の幅は広いことが分かりました。また、医科やリハビリテーション科など他の科との連携があり、コミュニケーション能力も必要であると思いました。そして、口腔と全身の健康は相互に影響するというのを改めて感じ、まだまだ知識が足りないということを実感しました。

この実習を通して、歯科衛生士・社会福祉士に必要な知識や能力を学ぶことができ、将来自分があるべき姿を考えることができました。これからはそれを意識しながら、日々の実習・講義・PBLに励みたいと思います。

学 会 報 告

平成26年度 新潟歯学会第2回例会報告

新潟歯学会集会幹事
包括歯科補綴学分野 助教 櫻井直樹

平成26年度新潟歯学会第2回例会が平成26年11月8日(土)に歯学部講堂で開催されました(写真)。

一般口演は13演題で、学位研究から症例報告、臨床統計報告まで幅広い内容の発表があり、多くの方にご参加をいただき、活発な討論が行われました。

総会、第1回例会、第2回例会を通して、座長の先生方をはじめ演者の方々や参加して下さった皆様のご協力のおかげで、平成26年度の新潟歯学会を無事に終了できました。この場をお借りして、皆様に厚く御礼申し上げます。また、今年度から、新しい試みとして、スライドデータの事前提出を基本とする学会運営を行いました。演者の先生方のご協力もあり、大きなトラブルもなく歯

学会を開催できました。先生方には感謝申し上げます。

当分野医局員も運営スタッフとして貴重な経験をさせていただきました。今年度から、歯学会の会務担当を2年連続で行うことになりましたので、引き続き、当分野が集会担当を行いますので、次年度も宜しくお願い申し上げます。また、平成27年度から新潟歯学会賞が創設されますので、学位研究発表を予定されている大学院の先生方には大いに励みになると思います。

新潟歯学会に関する詳しい情報は新潟歯学会ホームページ
(<http://www.sksp.co.jp/nds/index.html>)
をご覧ください。





同窓会だより

歯学科6年生、口腔生命福祉学科4年生と歯学部同窓会との交流会

渉外担当理事 池田 順行

平成26年9月19日（金）に「歯学科6年生、口腔生命福祉学科4年生と新潟大学歯学部同窓会との交流会」が開催されました。まず歯学部講堂にて同窓会の説明会が行われました。多和田孝雄会長の挨拶にはじまり、内藤義隆専務理事から同窓会の説明がなされ、奥村暢旦会計理事からは同窓会の入会案内があり、広報の野内昭宏先生からは歯学部卒業後についてのプレゼンテーションがありました。続いて場所を歯学部アメニティース

ペースに移し、懇親会が行われました。準会員研修医支援部の有松美紀子理事の乾杯の挨拶に始まり、1時間半ほどの歓談の時間はあっという間に過ぎ、福島正義副会長の挨拶にて閉会となりました。この交流会では、同窓会の先生方から、卒業後に困ったときはぜひ同窓会のつながりを利用してほしいとアドバイスがあり、また卒業後は同窓会の一員として、新潟大学歯学部同窓会を協力してさらに盛り上げていただくようお願いがありました。今回の交流会が、国家試験をひかえ不安な時期でもある卒業前の学生さんにとっての安心材料になれば幸いですし、今後、新潟大学歯学部同窓会が若い力を得てさらに盛り上がっていくようお願いしております。



同窓会の説明風景



懇親会風景



医歯学祭を終えて

歯学科3年 山本 悠

はじめに、第四回医歯学祭を開催できましたことにおきましては、前田学部長、顧問の佐伯先生、医歯学祭実行委員会設立の際にお世話になりました山村先生、学務系の皆様、歯学部関係者の皆様、まことにありがとうございました。

こんにちには、第四回医歯学祭実行委員会委員長山本悠です。歯学部ニュースには毎年『歯学生の今』ということで文を掲載させて頂いていますが、今回は医歯学祭についてです。

突然ですが、皆さんは医歯学祭についてどのように考えているのでしょうか。数秒考えて頂きたいと思います。……………はい！時間になりました。そうです。文化祭です。たかが文化祭です。しかしされど文化祭。奥はものすごく深いです。そんな文化祭に、一年生の頃から、三年生の今まで、全力で、本気で取り組んだことは、私の自慢です。そして、この医歯学祭を共に作り上げてくれた歯学部の友も自慢です。とても感謝しています。ありがとうございます。

初めて旭町の文化祭に行ったのは、一年生の時でした。前夜祭に行ったときの衝撃は忘れられません。歯学部生がいない。もちろん本祭をみても、いない。そこはまさに医学祭でした。

どこをみても、医歯学祭には『歯』がないんです。『歯』がないということは、極めて重大な問題である。審美的にも機能的にも。どうりで、いまいち花がない。雰囲気もイマ〇チ。では運営、企画をみると、言わずもがな。です。『歯』がないということは、ここまで質、いいかえればQOLを低下させてしまうのだと、ひしひしと感じました。

冗談はこのへんにしまして、私が一年生の頃は、医歯学祭実行委員に歯学部生はひとりも在籍していませんでした。というよりも、歯学部に行き実行委員会が存在しないため、在籍できないということでした。そのため、歯学部側には情報はま

わってこない、つまりは参加しようとする人もいない。という悪循環になっていました。

私の行動はここから始まります。三年生が学祭の運営をするので、三年生までには、ある程度環境を整えよう。そして卒業するまでに、確たるものを確立しようと考えました。六ヶ年計画です。今も進行中です。

まず、学祭終了数日後の、実行委員主催イベントに参加をしました。ようは、始めの偵察ということ。歯学部の一年生は私一人、もちろん歯学部の先輩は一人もいません。そこで様々な情報を仕入れて、次のイベントには、歯学部のメンバーも誘って参加をしました。このメンバーこそが、共に医歯学祭を歯学部に着、周知させ、内外で歯学部への存在感、発言力を高めてくれた精鋭部隊です。

三年生が主に学祭を運営するので、それまでの一、二年生のうちは出来るだけ、多くのイベントに参加し、医学部の先輩に顔を覚えてもらう。そして、学祭運営、その他もろもろのノウハウを学びました。その頃は歯学部にも、そのような話を聞ける先輩は一人もいませんでしたが、今後は歯学部の先輩後輩でもそのような話をすることができるようになります。

二年生の時は次なる問題が出てきました。歯学部の実行委員メンバーが一、二年生で10人ほどになりましたが、なんと歯学部生が所属する実行委員会がないのです。私も始めは知らなかったことですが、医学部には大学公認の医歯学祭実行委員会があり、もちろん顧問の先生もいるので、彼らはそこに在籍し、オフィシャルな活動ができます。しかし歯学部には、実行委員がないため私たち歯学部生だけが大学非公認のよくわからない存在、立場でした。非公認なので、内外の活動、後輩勧誘も非公認、なにか問題があっても、大学の非公認ですから、歯学部生だけが不利益を被る可

能性もありました。そこで取り組んだのは、歯学部にて実行委員会を作ることでした。ただ作るにしても、公式なものなので、顧問の先生も必要になりますし、新たなものを立ち上げるので、様々な方のご協力も必要になります。前田先生、山村先生、学務係の方のご協力もあり、三年生の4月には無事、歯学部にも実行委員会を設立することができました。顧問は佐伯先生にやって頂くことになりました。今現在の歯学部医歯学祭実行委員会は、一年生から三年生で20名ほどになりました。

ここまでが『医歯学祭』に『歯』を生やす準備です。予定通り三年生までに、歯学部も主体的に活動できる場を作ることができたので、いよいよ活動が始まります。『歯』を生やしていきます。

第四回にして、歯学部が初めて主体的に医学部と共に医歯学祭を作り上げる、今回が第一回と言ってもいいと思います。第一回ということは、運営企画以外にこれでもか、というくらいの問題が起きてきます。まず最初に、あらゆる資料、企画書、内外へ提出する書類はすべて医学祭名義でしたので、それを一つ一つ医歯学祭に直す作業から始まりました。歯学部が運営に携わることを、よく思わない人からはいわれのない批判を受けたりと、様々ありましたが、すべては逆に私の力になりました。初めてなので、煙たがれること、批判を受けることは承知の上でした。歯学部にて実行委員を設立しておいて、今までとたいして変わらなければ、今までの行動がすべて無駄になってし

まいますし、『所詮そんなもんか』と思われてしまったら、意味がありません。最初で最後のチャンスだと思い、これでもか、というくらいに、徹底的に全力で行動してきました。

さてこれからが、話の山場になってきますが、なんと原稿に字数制限がありまして…まとめには入ろうとおもいます。

先述のように、たかが文化祭なんです。ではどうしてここまで、歯学部、医学部にこだわるのか、熱くなるのか、と思う方もいると思います。それは、文化祭を楽しみたいからです。ただ単に楽しみたい。この思いでやってきました。一、二年生の頃は、歯学生が楽しむ環境は整っていませんでした。おかしくないですか、私たちだけ、皆さんだけが楽しめない環境があるのは。これが、一年生の頃に感じた思いであり、私のモチベーションになりました。三年生になり、多くの歯学部生も楽しめる環境になってきました。がまだまだです。これから第5回6回…、10回…、と続いていきますが、本当の意味で医歯学祭になるように、完全に『歯』が生えるように、そして『歯』は完全に生えたように見えても、歯根は未完成です。しっかりと根付くように、しっかりとサポートをしていきたいとおもいます。それは10、20期生後の歯学生も楽しめるためにです。

多くの歯学部三年生には、言葉にならないくらいお世話になりました。みんなのお陰で、第四回医歯学祭は成功できたと思っています。ほんとうにありがとう。



筆者、前列左から二番目

教 職 員 異 動

学 部

【教員等】

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
採用	26. 10. 1	小 野 高 裕	包括歯科補綴学分野教授	
採用	26. 10. 1	加 藤 寛 子	生体組織再生工学分野特任助教	
採用	26. 10. 14	神 田 知 佳	摂食嚥下リハビリテーション学分野 産学官連携技術者（8 h）	
採用	26. 11. 1	岩 瀬 陽 子	小児歯科学分野特任助教（短時間）	医歯学総合病院医員
採用	26. 12. 1	澤 味 規	小児歯科学分野特任助教（短時間）	医歯学総合病院医員
退職	26. 12. 31	興 地 隆 史		う蝕学分野教授
任期満了	26. 12. 31	神 田 知 佳		摂食嚥下リハビリテーション学分野 産学官連携技術者（8 h）
任期満了	27. 1. 30	渡 邊 賢 礼		摂食嚥下リハビリテーション学分野 特任助教
退職	27. 1. 31	内 藤 康 子		摂食嚥下リハビリテーション学分野 技術補佐員（5 h）
退職	27. 1. 31	萩 原 洋 子		摂食嚥下リハビリテーション学分野 技術補佐員（5 h）
採用	27. 2. 24	神 田 知 佳	摂食嚥下リハビリテーション学分野 技術補佐員（8 h）	
退職	27. 2. 28	川 崎 勝 盛		口腔解剖学分野教務補佐員（24h）
退職	27. 2. 28	加 藤 寛 子		生体組織再生工学分野特任助教
採用	27. 3. 1	前 川 知 樹	高度口腔機能教育研究センター 特任助教	
採用	27. 3. 1	川 崎 勝 盛	高度口腔機能教育研究センター 特任助教	口腔解剖学分野教務補佐員（24h）
採用	27. 3. 1	加 藤 寛 子	高度口腔機能教育研究センター 特任助教	生体組織再生工学分野特任助教
定年退職	27. 3. 31	小 林 博		包括歯科補綴学分野准教授
退職	27. 3. 31	北 川 純 一		口腔生理学分野准教授
任期満了	27. 3. 31	狩 野 祥 司		大学院教育開発センター教授
任期満了	27. 3. 31	前 川 知 樹		高度口腔機能教育研究センター 特任助教
任期満了	27. 3. 31	川 崎 勝 盛		高度口腔機能教育研究センター 特任助教
任期満了	27. 3. 31	加 藤 寛 子		高度口腔機能教育研究センター 特任助教

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
任期満了	27. 3. 31	今 井 晴 菜		摂食嚥下リハビリテーション学分野 特任助教（短時間）
任期満了	27. 3. 31	星 野 正 明		口腔解剖学分野再雇用職員
任期満了	27. 3. 31	平 野 秀 利		口腔生理学分野再雇用職員
任期満了	27. 3. 31	森 田 航		硬組織形態学分野 研究支援者（科研費研究員） （15.5h）
任期満了	27. 3. 31	上 村 由紀子		摂食嚥下リハビリテーション学分野 技術補佐員（24h）
任期満了	27. 3. 31	神 田 知 佳		摂食嚥下リハビリテーション学分野 技術補佐員（8h）

【事務等】

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
任期満了	27. 3. 31	國 分 実		歯学部事務室総務係事務補 佐員（24h）
任期満了	27. 3. 31	渡 邊 美 奈		歯学部事務室学務係事務補 佐員（25h）



病院

【教員等】

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
退職	26. 9. 30	岩崎 正 則		予防・保存系歯科助教
任期満了	26. 9. 30	牧野 由 佳		予防・保存系歯科医員
任期満了	26. 9. 30	大墨 竜 也		予防・保存系歯科医員
採用	26. 10. 1	菅井 登志子	口腔外科系歯科医員	新規
採用	26. 10. 1	皆川 久美子	予防・保存系歯科医員	予防・保存系歯科医員 (パートタイム)
採用	26. 10. 1	若松 里 佳	予防・保存系歯科医員	新規
採用	26. 10. 1	小林 美 登	予防・保存系歯科医員	予防・保存系歯科医員 (パートタイム)
退職	26. 10. 31	岩瀬 陽 子	(26.11.1 医歯学系特任助教)	矯正・小児系歯科医員
退職	26. 10. 31	堀 沙耶香		予防・保存系歯科医員
退職	26. 10. 31	茂木 香 織		歯科総合診療部医員 (パートタイム)
昇任	26. 11. 1	児玉 泰 光	口腔外科系歯科講師	口腔外科系歯科助教
採用	26. 11. 1	佐藤 拓 実	歯科総合診療部レジデント (パートタイム)	新規
退職	26. 11. 30	小野 由起子		口腔外科系歯科助教
退職	26. 11. 30	澤 味 規	(26.12.1 医歯学系特任助教)	矯正・小児系歯科医員
退職	26. 11. 30	村上 望		矯正・小児系歯科医員 (パートタイム)
採用	26. 12. 1	堀水 慎	予防・保存系歯科医員	予防・保存系歯科医員 (パートタイム)
採用	26. 12. 1	宮澤 春 菜	予防・保存系歯科医員	予防・保存系歯科医員 (パートタイム)
採用	26. 12. 1	齋藤 祐 太	歯科総合診療部レジデント	歯科総合診療部レジデント (パートタイム)
採用	27. 1. 1	高橋 功次朗	矯正・小児系歯科医員	矯正・小児系歯科医員 (パートタイム)
育児休業	27. 1. 1	野中 由香莉		予防・保存系歯科医員
採用	27. 2. 1	西川 敦	口腔外科系歯科助教	口腔外科系歯科医員
採用	27. 2. 1	渡邊 賢 礼	摂食機能・補綴系歯科医員	医歯学系特任助教
退職	27. 2. 28	金城 篤 史		摂食機能・補綴系歯科医員
採用	27. 3. 1	新美 奏 恵	口腔外科系歯科助教	地域保健医療推進部特任助教
退職	27. 3. 19	安島 久 雄		口腔外科系歯科助教
任期満了	27. 3. 31	坂上 直 子		口腔外科系歯科医員
任期満了	27. 3. 31	浅井 佑 介		口腔外科系歯科医員

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
任期満了	27. 3. 31	齋藤大輔		口腔外科系歯科医員 (パートタイム)
任期満了	27. 3. 31	齋藤正直		口腔外科系歯科医員
任期満了	27. 3. 31	五十嵐友樹		口腔外科系歯科医員
任期満了	27. 3. 31	上野山敦士		口腔外科系歯科医員 (パートタイム)
任期満了	27. 3. 31	山田瑛子		口腔外科系歯科医員 (パートタイム)
任期満了	27. 3. 31	左右田美樹		矯正・小児系歯科レジデント
任期満了	27. 3. 31	工藤和子		矯正・小児系歯科医員
任期満了	27. 3. 31	小栗由充		矯正・小児系歯科医員
任期満了	27. 3. 31	中田樹里		矯正・小児系歯科レジデント
任期満了	27. 3. 31	焼田裕里		矯正・小児系歯科医員 (パートタイム)
任期満了	27. 3. 31	大竹正紀		矯正・小児系歯科医員 (パートタイム)
任期満了	27. 3. 31	高辻華子		矯正・小児系歯科医員 (パートタイム)
任期満了	27. 3. 31	北見公平		矯正・小児系歯科医員 (パートタイム)
任期満了	27. 3. 31	瀧口知彌		予防・保存系歯科医員 (パートタイム)
任期満了	27. 3. 31	奥井隆文		予防・保存系歯科医員
任期満了	27. 3. 31	中島悠		予防・保存系歯科医員
任期満了	27. 3. 31	小林美登		予防・保存系歯科医員
任期満了	27. 3. 31	山田ひとみ		予防・保存系歯科医員 (パートタイム)
任期満了	27. 3. 31	神谷真菜		予防・保存系歯科医員 (パートタイム)
任期満了	27. 3. 31	枝並直樹		予防・保存系歯科レジデント
任期満了	27. 3. 31	武井絵梨花		予防・保存系歯科医員 (パートタイム)
任期満了	27. 3. 31	井田貴子		摂食機能・補綴系歯科レジデント (パートタイム)
任期満了	27. 3. 31	江口香里		摂食機能・補綴系歯科レジデント (パートタイム)
任期満了	27. 3. 31	杉友希		摂食機能・補綴系歯科レジデント
任期満了	27. 3. 31	平山恵美子		歯科総合診療部レジデント
任期満了	27. 3. 31	齋藤祐太		歯科総合診療部レジデント

【看護・診療支援部】

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
採用	26. 9. 1	土 田 沙耶香	診療支援部歯科衛生部門歯科衛生士	新規
所属換	26. 10. 1	宮 内 貴 未	看護部東3階病棟看護師	看護部東6階病棟看護師
所属換	26. 10. 1	大 矢 舞	看護部集中治療部看護師	看護部東3階病棟看護師
所属換	26. 10. 1	岡 田 紀 子	看護部東7階病棟看護師	看護部東3階病棟看護師
所属換	26. 11. 20	野 村 愛	看護部外来4・5階看護師	看護部西10階病棟看護師
退職	26. 11. 30	小 平 友里枝		看護部東3階病棟看護師
所属換	27. 3. 23	中 村 智 絵	看護部東3階病棟副看護師長	看護部西8階病棟副看護師長
退職	27. 3. 31	六 井 祐 子	看護部東3階病棟副看護師長	
任期満了	27. 3. 31	今 井 晴 菜		摂食嚥下機能回復部歯科衛生士（パートタイム）

【事務部】

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
採用	26. 4. 1	菊 池 博 之	経営企画課長	文部科学省高等教育局 医学教育課医学教育係長
昇任	26. 4. 1	小 林 晴 男	医事課長	経営企画課副課長
配置換	26. 4. 1	木 村 久 明	管理運営課長	医事課長
配置換	26. 4. 1	本 田 政 博	人文社会・教育科学系総務課長	管理運営課長
配置換	26. 4. 1	清 水 紀 之	経営企画課副課長	総務部総務課副課長
配置換	26. 4. 1	岩 田 尚 志	総務課総務係長	総務部総務課秘書係長
配置換	26. 4. 1	星 野 智 裕	管理運営課管理係長	医事課診療請求係長
配置換	26. 4. 1	鈴 木 忍	管理運営課医療材料係長	研究支援部産学連携課地域 連携係長
配置換	26. 4. 1	佐 藤 泉 穂	管理運営課臨床研究支援係長	医事課診療管理係長

医師クラークをご存知ですか？

新潟大学医歯学総合病院 見 田 絵 里 子
 歯科 医師クラーク

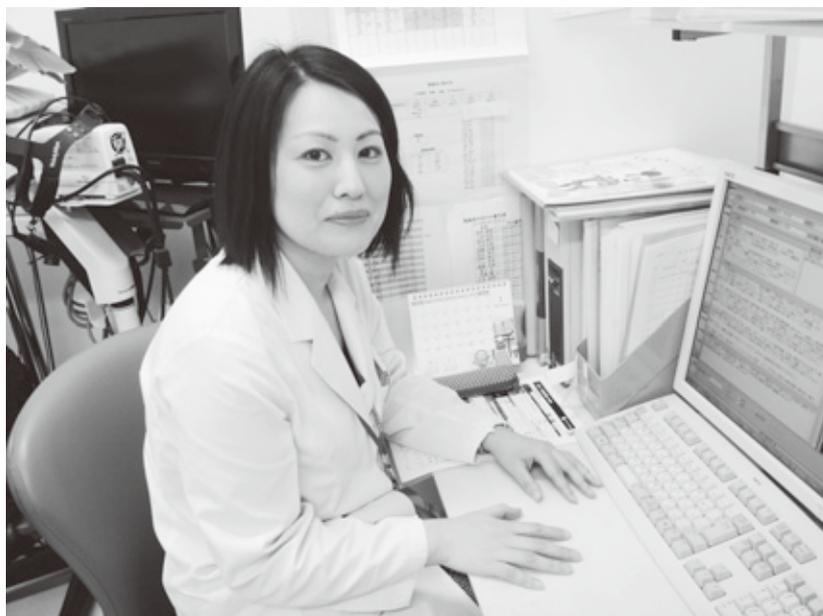
歯科配属の医師クラークの見田です。口腔外科を中心にお仕事をさせていただいておりますので、口腔外科以外の診療科ではご存知ない先生が多いと思います。この場をお借りしまして『医師クラーク』について少し紹介させていただきます。

『医師事務作業補助者』と言った方が分かりやすいと思いますが、名の通り診断書作成等の事務作業を補助するスタッフのことで、医師の事務負担を軽減することを目的に配置され、私は2011年12月より勤務させていただいております。

通常は口腔外科外来で先生の指示の下、新患の振り分けなど行いながら、診断書や紹介状返書、入院総括等の文書作成補助業務を主に行っております。中でも圧倒的に多いのが診断書などの患者さんが医事課文書窓口を通して作成依頼した文書や公費文書で、歯科では月に80~100件程あります。主な文書は保険会社の入院通院証明書、傷病手当金申請書、介護主治医意見書、自賠責保険診断書、労災保険関連の文書、生活保護の医療要否

意見書、自立支援医療意見書などがありますが、一括して医師クラークに届き、全件医師クラークが作成補助を行っております。先生に確認・修正していただき完成した文書は医師クラークが医事課文書窓口へ送付し、医事課文書窓口が患者さんへ文書を交付する流れになっておりますので、今後患者さんから文書作成の依頼がございましたら、至急でなければエントランス階にある医事課文書窓口をご案内していただければと思います。

口腔外科は先生のご指導のおかげで完全ではありませんが文書作成補助ができるまでになりましたが、その他の診療科は勉強不足のため、毎回拙い下書きで大変ご迷惑をおかけしております。また通常メールにて作成依頼のご案内を差し上げており、間接的で解りづらく誠にご不便をおかけしていることと思いますが、迅速に作成して下さる先生が多く文書管理がスムーズに行えております。診療科によっては診療中でありながら図々しく先生のところに押しかけてご案内することもあります。親切に対応して下さりとても感謝しております。これからも先生のお役に立てるように頑張ってお参りますので、何卒宜しくお願い致します。



編集後記

“歯学部ニュース通巻126号は投稿が少なく白紙のまま発行になりました。”という不安に駆りたてられて本号の編集を始めたものの、それも杞憂に終わり、執筆者の皆様方の心のもった原稿をいただき発行にこぎつけることができました。玉稿を頂戴いたしました皆様に厚く御礼申し上げます。本号はこれまでの編集内容を踏襲しオーソドックスな構成になっておりますが、歯学部における活動を生き生きと伝えられるように執筆者のみな様にご依頼して、画像も充実させた編集となっております。新潟大学歯学部の“いま”を感じていただけますと幸いです。また、編集を担当いただきました先生には、いろいろ細かいことに注文をつけましたが、この場を借りて感謝を申し上げます。

歯科麻酔学分野 照光 真

今回、初めて歯学部ニュース編集委員を担当させていただきました。今まで読んでいた歯学部ニュースですが、読んでいただけと編集するのはもちろん大違いで、編集委員を引き受けた時は不安もありましたが、何とか役割を全うすることができました。突然の執筆依頼にも関わらずお忙しい中、締切どおりに快くご執筆下さった先生方、学生の皆さん、本当にありがとうございました。読者の皆さんには楽しんでいただければ幸いです。

歯科矯正学分野 竹山 雅規

お忙しい中、寄稿を快く了解して下さった方々には、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

顎顔面口腔外科学分野 児玉 泰光

今回、初めて歯学部ニュース編集委員を担当させていただきました。今までは何気なく読んでいた歯学部ニュースですが、今回編集に関わったことで編集や執筆に携わる多くの方々の尽力があって初めて完成できることを改めて実感いたしました。今後はまた新鮮な気持ちで読ませていただくことができそうです。

最後になりましたが、突然のお願いにも関わらず原稿執筆を快く引き受けて下さった先生方、学生の皆さんに感謝申し上げます。

生体歯科補綴学分野 秋葉 奈美

歯学部ニュース編集委員を初めて仰せつかりました。照光編集長の指揮の下、皆さんの協力を得て無事発行の運びとなりました。私は主として「歯学体報告」「部活動紹介」など歯学部生の項目を多く受け持ちました。私からメールで送られた突然の原稿依頼にも関わらず、皆さん快く引き受けてくださいました。また原稿締め切りの期日が近づくにつれ、本当に原稿を書いているのだろうかと一人で勝手に心配しましたが、皆さん期日通りに仕上げ送っていただき、不安になった自分を恥じました。本当にすばらしい学生さんたちでした。ありがとうございました。

インプラント治療部 山田 一穂

歯学部ニュース

平成26年度第2号（通算126号）

発行者 新潟大学歯学部広報委員会
編集責任者 照光 真、魚島 勝美
編集委員 竹山 雅規、児玉 泰光
秋葉 奈美、山田 一穂
印刷所 (株)ウイザップ

表紙・裏表紙写真の説明

表紙の撮影データ

撮影地：シカゴ (Willis Tower Skydeck)

撮影日：2014年12月

使用機材：OLYMPUS E-P 5 / M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0 / 絞り：F2.0 ·
シャッター速度：40分の1秒

裏表紙の撮影データ

撮影地：奈良 (東大寺二月堂)

撮影日：2015年1月

使用機材：OLYMPUS E-P 5 / M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0 / 絞り：F3.5 ·
シャッター速度：250分の1秒

コメント：今回は、35mm判換算焦点距離で24mm相当の広角レンズを使った「高所からの見下ろし感」をテーマに、異なる文化の題材を用いて、「このはるか先には何があるのだろうか？」と思わせるような、画面に奥行きを感じられるように描いてみました。表紙はF2.0開放、裏表紙もF3.5と絞りは開け気味ですが、被写体までの距離が比較的遠いことと、12mmという焦点距離から、ほとんどパンフォーカスに近い表現が出来ていると思います。

本誌中の写真の使用機材

ボディ：OLYMPUS E-P 5

レンズ：M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0, M.ZUIKO DIGITAL 45mm F1.8,
M.ZUIKO DIGITAL ED 60mm F2.8 Macro

撮影者：林 孝文

